

# 楽浪土城の青銅鏃

鄭 仁 盛

## I. はじめに

前稿では楽浪土城から出土した青銅遺物の中、青銅器の製作に関係する遺物を紹介し楽浪土城の内で青銅器の製作が行われたことを明らかにし、また青銅器製作工房の位置を関連遺物の出土地点を参考に確認した(鄭仁盛 2001)。小考は前稿では紹介していない青銅製品のうち青銅鏃を紹介し、その特性や製作技法、また楽浪土城出土青銅鏃の意味等について考えてみることにする。

現在東京大学の考古学研究室に保管されている楽浪土城出土の青銅遺物は、前稿で紹介した青銅器製作関係の遺物を含め200点程度である<sup>1)</sup>。1965年度に提出された楽浪土城の報告書には貨幣を含め37点の青銅遺物の写真が紹介されたが、それ以外の遺物はまだ未報告である。

報告書で紹介された青銅遺物は現在調査当時の遺物封筒から既に出され、また各々の遺物に注記がないため出土地点は不明である。既刊報告書(駒井和爱 1965)の本文にトレンチ別の出土遺物に関する記録があるが、青銅鏃や貨幣など複数出土した遺物の場合各々の正確な出土位置の特定は難しい。青銅鏃の場合既刊報告書に11点の資料が写真で紹介されているが図面は一切ない。

その後考古学研究室の‘考古図編’を製作する際に一部遺物の整理が行われたらしく、のちには谷豊信によって一部注記がされたようである。しかしながらこれらの遺物を除いた大多数の青銅製品は発掘当時の紙封筒に入れられたまま木箱に保管されてきた。これらの遺物を入れた封筒には殆んどに出土地点と出土日時に関する注記がある。

## II. 楽浪土城出土青銅鏃の紹介

青銅鏃は頭の形により大まかに両翼、三翼、三稜、四稜に分類できるため遺物の紹介はおおむねこの順で行う。また細かい分類や製作技法等は次の第III章で詳しく検討する。

戦国時代の中国における青銅鏃の名称は、本文第IV章の図10-1で見ると国によって各々異なっていた(林巳奈夫 1976)が、現在は鏃と言うのが一般的で、小考でも鏃と呼ぶことにする。ただ各部位の名称は中国の呼び方に従うことが難しいところもある。例えば中国では茎を‘鋌’と表現することが多く、鉄素材の鋌は鉄鋌と言う。しかし鉄鋌という用語は韓国および日本考古学では三国・古墳時代の板状の鉄素材を示すことになり混乱が生じる。

したがって小考では鏃の各部分の名称を図1のように人体に対比し頭部、頸部、顎、基部などと表現する。また頸部及び頭部に挿し込まれた(鉄)棒は‘芯’、一部三稜鏃の頭にみられる凹みは

切り込みと呼ぶ。顎はその形態から図7のように1～4の四つのタイプに分類する。この場合4形とはその形態が各面で異なるタイプのものを指す。大体一面は両方1形が多いが、これにつながる反対面は2あるいはそれに近いものが多い。すなわち顎が左右斜めになっている。これは製作技法と密接に関係すると考えているがこの点についても第三章で詳しく説明する。

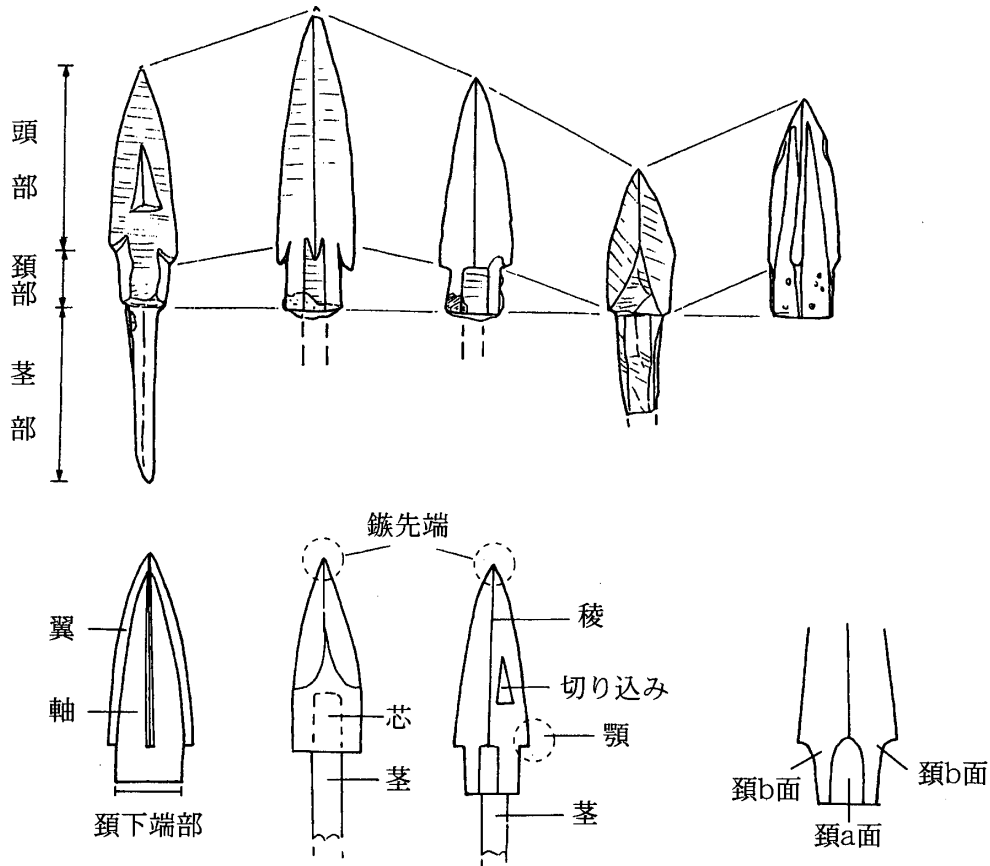


図1 青銅鍔の各部名称

### 両翼形

1 (図2-1) C"-1区から出土した。封筒には1935年4月26日と書かれており、1次調査で出土したことが分かる。両翼形で軸は断面円形の中実である。先端部には湯口張りを切ったと思われる痕跡を残す。仕上がり段階の研磨はなく下半は欠失している。

残存長：2.9cm 幅：1.65cm 重さ：4.2g

### 三翼形

1 (図2-2) 報告書に写真が載せられているが出土地点は確認できない。頭部は断面六角形で三方に翼がつく。頸は断面円形の中実である。鑄造後仕上げ段階できれいに研磨され鑄造と関連する痕跡は一切残っていない。茎は断面円形の鉄製であるが欠失し痕跡だけが残る。頭・茎部には鍍

### 楽浪土城の青銅鏃

が生じており、亀裂には芯から生じた鉄錆が付着している。

鏃長：5.05cm 頭部幅：1.3cm 頸部径：1.1cm 重さ：22.8g（鏃長の計測は茎部を除く－以下同じ－）

2（図2-3） G25～26区の北から1937年6月10日に出土した。鏃頭は断面三角形で各隅に翼がつく中空で、頸は断面円形である。頸の外面には三つの鑄型合わせ痕が残る。頸部には気泡が生じており、頸下端部は研磨されてない。鑄の回りが悪かったのか、あるいは中子の位置がずれていたのか、頭の軸には鑄造時生じた孔がある。仕上がり段階での研磨は認められない。全長：3.15cm 頭部幅：1.0cm 頸部径：0.8cm 重さ：4.3g

3（図2-4） D3-4区で1935年10月5日採集したものである。頭部は変形の三翼形であるが、頸部は断面円形の中実をなす。茎は鉄製であるが欠失し痕跡だけが残る。全体的に錆が激しく、鑄造痕及び仕上がり段階の研磨痕等は観察できない。残存長：3.2cm 幅：0.9cm 茎部径：0.35cm 重さ：5.7g

### 三稜形

1（図2-5） 頭部の断面は三角形で、頸部断面は隅丸の六角形で円形に近い。茎は青銅製で断面は円形である。鑄造後仕上がり段階で頭と頸を研磨した痕跡が残るが粗い。残存状態は比較的良好。鏃長：3cm 頭部長：2cm 頭部幅：0.8cm 重さ：4.0g

2（図2-6） G1区の土壌内深さ3m20cmから出土。採集日は1937年6月12日である。鏃頭部は断面三角形であり頸部は隅丸で円形に近い。茎は断面円形の青銅で頭や頸と同時に鑄造されている。鏃頭や頸部には仕上がり段階の研磨痕は明らかではない。茎には気泡が生じ下端部は破損している。鏃長：3.5cm 鏃頭幅：1cm 茎部長：1.4cm 茎部径：0.5cm 重さ：8.4g

3（図2-7） 出土地点は明らかではない。鏃頭は断面三角形であるが、頸部の断面は円形である。茎部は鉄で断面は円形であるが欠失し芯部のみ残存する。仕上がり段階できれいに研磨されている。残存状態は比較的良好であるが、鏃頭・頸の表面には一部錆が生じている。鏃長：2.8cm 頭部幅：1.2cm 茎部径：0.26cm 重さ：12.5g

4（図2-8） G区の東北角から出土した。1937年6月18日に採集したものである。鏃頭は断面三角形で頸は断面円形である。茎は断面円形の鉄製であるが欠失している。表面全体に錆が生じている。鏃長：2.8cm 頭部幅：1.2cm 茎部径：0.26cm 重さ：12.5g

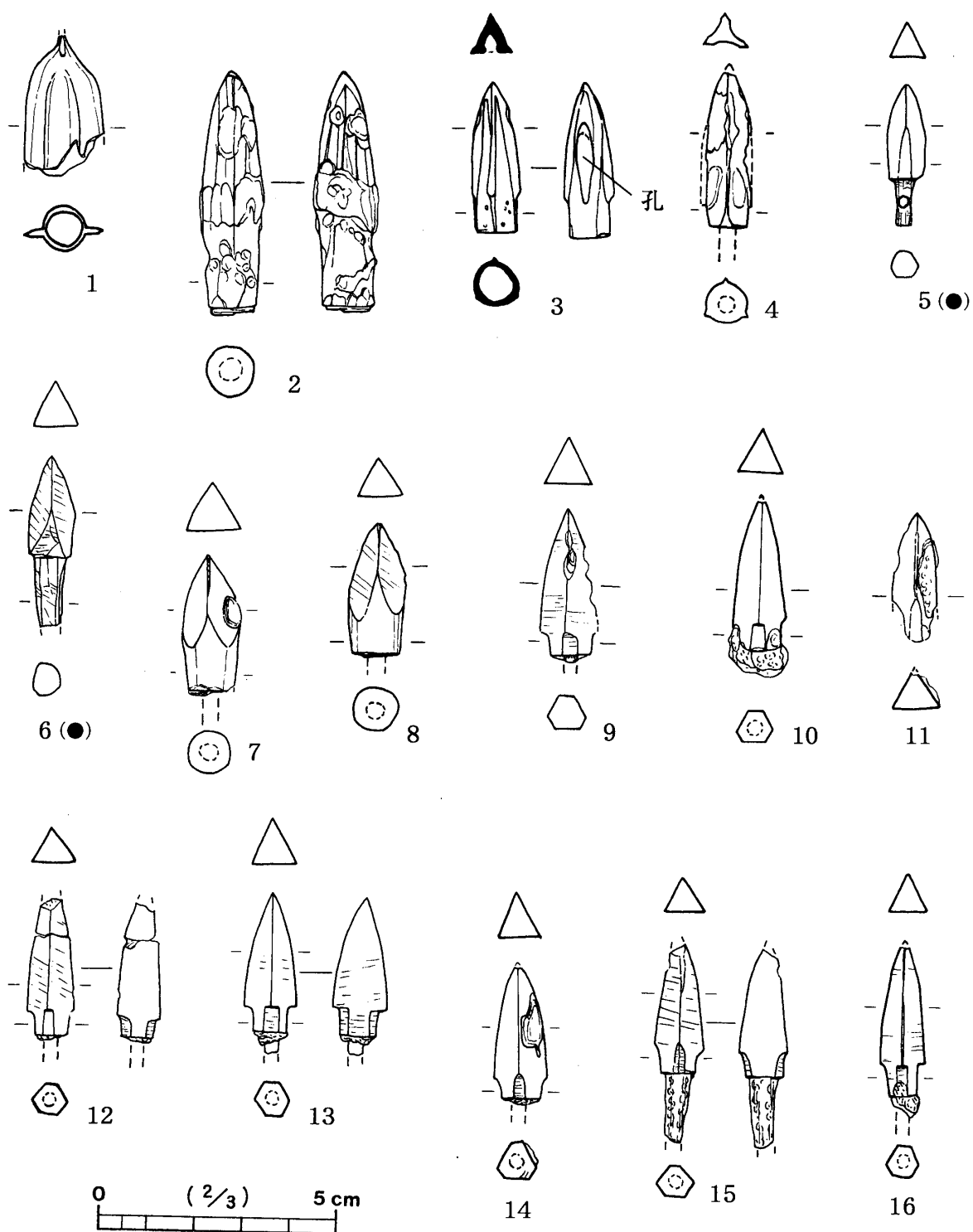


図2 楽浪土城出土の青銅鏃 (1:両翼, 2~4:三翼鏃, その他は三稜鏃, ●は茎が青銅)

次の図2-9から図4-4までの資料はほぼ同じ型式の三稜鏃で、頭部の断面は三角形、頸部断面は六角形である。また頭部には切り込みがないのが特徴である。したがってこれに関する基本説明は省略することにする。また鏃の類は図7のように1, 2, 3, 4に分けて説明する。

楽浪土城の青銅鏃

5 (図2-9) D3-5区から1935年10月5日に出土した。顎は3形で頭と頸には研磨痕が残る。茎は鉄製で芯部を除いた部分は欠失した。鏃の表面には錆が生じている。鏃長：3.1cm 頭部幅：1.25cm 頭部長：2.2cm 重さ：9.1g

6 (図2-10) 頭部の外縁はやや曲線的で顎は2形である。茎には錆が生じている。頭と頸はその表面の剥落が進んでおり、研磨痕等は観察できない。鏃長：3.2cm 頭部幅：1.1cm 頭長：2.6cm 重さ：9.4g

7 (図2-11) D5-2区から出土したもので1935年10月5日との注記がある。研究室の旧整理番号はA22である。頭の外縁はやや曲線的であるが、頸は欠失している。鏃表面の腐蝕が激しく研磨痕等は観察されない。鏃残存長：2.65cm 頭部幅：0.90cm 重さ：3.9g

8 (図2-12) D4-4区から1935年9月24日出土したものである。顎は3形である。茎部は断面の円形の鉄製である。頭と頸には仕上がり段階の研磨痕が観察される。頭先端部は欠失している。鏃残存長：2.9cm (推定) 鏃長：3.2cm 頭部幅：0.9cm 茎部長：0.5cm 重さ：3.7g

9 (図2-13) D4-1区から1935年10月1日出土した。顎は2形で、茎は断面円形の鉄製である。残存状態は比較的良好で仕上がり段階できれいに研磨されている。鏃長：3.0cm 幅：1.12cm 身部上段：2.4cm 重さ：6.9g

10 (図2-14) C2-1区から1935年10月4日に出土した。顎は3形である。茎は断面円形の鉄である。頭部と頸部には仕上がり段階の研磨がよく残っており、特に頸の研磨痕は明確である。頭には内部の鉄芯から生じた錆による亀裂が生じている。鏃長：2.85cm 頭部幅：1.1cm 頭部長：2.5cm 重さ：6.4g

11 (図2-15) D5区の東にある溝から1935年10月10日に出土した。顎は3形である。茎は鉄で断面は円形で一部残存するが先端は欠失している。頭と頸には研磨痕が残る。頸のa面は両方からの研磨が行われたため、中央に稜が生じている。頭の研磨には粒子の細かい砥石が、頸部の研磨にはそれよりは目の粗い砥石が使われたようである。まず頭と頸b面を同時に研磨した後、頸a面は別の砥石で研磨したと考えられる。推定鏃長：3.0cm 頭部幅：1.0cm 頭部長：2.8cm 残存茎部長：1.5cm 重さ：6.9g

12 (図2-16) D4-2区から1935年10月7日に出土したものである。顎は1形である。茎は欠失しているが、頸の表面と下端部に鉄錆が附着することから鉄であったことがわかる。頭にも鉄芯から生じた錆が付着する。推定鏃長：3.3cm 頭部幅：0.9cm 頭部長：2.7cm 重さ：5.3g

13 (図3-1) 出土地点はわからない。顎は3形で茎は欠失しているが、頸に残る鉄錆から鉄だったことがわかる。頭と頸には鏃と直交する研磨痕が残る。鏃長：2.9cm 頭部幅：1.05cm 頭部長：2.4cm 重さ：7.6g

14 (図3-2) E'-14区から1935年9月16日に出土した。顎は2形である。茎は鉄製で断面は円形である。鏃全体に錆が付着しており研磨痕等は観察できない。頭の先端が欠失している。残存鏃長：2.65cm 頭部幅：1.12cm 頸部長：0.45cm 重さ：5.5g

15 (図3-3) 出土地点はD2区で1935年9月14日に出土した。顎は2形で茎は断面円形の鉄製である。芯のみ残り茎は欠損している。鋸長：2.9cm 頭部幅：0.95cm 頭部長：2.3cm 重さ：5.3g

16 (図3-4) D3-1区から1935年10月1日に出土した。研究室の旧整理番号はA24である。鋸の外縁は曲線的で顎は3形である。茎は鉄であるが欠失している。頭の一面には芯から生じた鉄錆が付着する。鋸長：2.9cm 頭部長：2.2cm 頭部幅：1.0cm 重さ：6.4g

17 (図3-5) D4-1区から1935年10月1日に出土した。顎は4形で頸は断面六角形である。茎は欠失し明らかではないが、頭の一面に鉄錆が生じていることから鉄製であったことがわかる。頸にはうすく鋳型合わせ痕が残る。頭と頸には仕上がり段階の研磨痕が残る。鋸長：2.5cm 頭部幅：0.8cm 頭部長：2.15cm 重さ：2.9g

18 (図3-6) 顎は2形である。茎部は鉄であるが欠損している。頭の一部に亀裂が生じ内部からこぼれ出た鉄錆が付着する。仕上りの研磨は鋸の長軸方向と平行して行われているが、頸a面は長軸方向と直交して研磨されている。鋸長：2.75cm 頭部幅：1.1cm 頭部長：2.15cm 重さ：6.9g

19 (図3-7) D4-1区から1935年10月6日に出土したもので調査当時与えられた番号<sup>2)</sup>は8, 研究室の旧整理番号<sup>3)</sup>はA27である。頭の外縁は曲線的で顎は2形である。茎は鉄製, 断面は三角形に近いが欠損している。頭の一面には鉄芯の腐蝕による亀裂がある。鋸長：2.90cm 頭部幅：1.00cm 頭部長：2.45cm 重さ：5.8g

20 (図3-8) F4-4区から6月11日出土した。封筒にはNo13と注記されている。顎は3形で頸a面には鋸の長軸方向と直交する研磨痕が残る。茎は鉄製であるが先端部の一部が欠失している。残存長鋸：2.5cm 頭部幅：1.0cm 頸部長：0.4cm 重さ：5.4g

21 (図3-9) F5-1区から6月19日に採集した。封筒にはNo10との注記がある。顎の形は3形, 茎は鉄製で欠損しているものの痕跡が残る。頭と頸のb面には鋸と直交する研磨痕が残る。頸のa面は2回に分けて各々角度を異にして研磨され, 中央には稜が生じている。全体的に細長いのが特徴である。鋸長：3.4cm 頭部幅：0.7cm 頭部長：2.7cm 重さ：4.0g

22 (図3-10) F5-5区から6月16日に出土した。発掘当時に与えられた番号はNo14である。顎の形態は3である。茎は断面円形の鉄であるが欠損した。頭と頸には鋸と直交する研磨痕が残る。鋸長：2.9cm 頭部幅：1.0cm 重さ：6.4g

23 (図3-11) F5-4区から6月20日, すなわち3次調査で出土したものである。調査当時遺物に与えられた番号は1である。頭の外縁は曲線的で顎は3形である。頸は破損し芯が抜けて中空状になっている。頭に一部研磨痕が残ること, また頸の下端部にも研磨痕が残ることから製作に失敗したというよりも発射され何かに当たって破損した可能性が高い。頭部幅：1.0cm 頸部長：0.6cm 重さ：3.6g

24 (図3-12) F5-4区から6月20日との注記が封筒に残されていることから3次調査で出

楽浪土城の青銅鏃

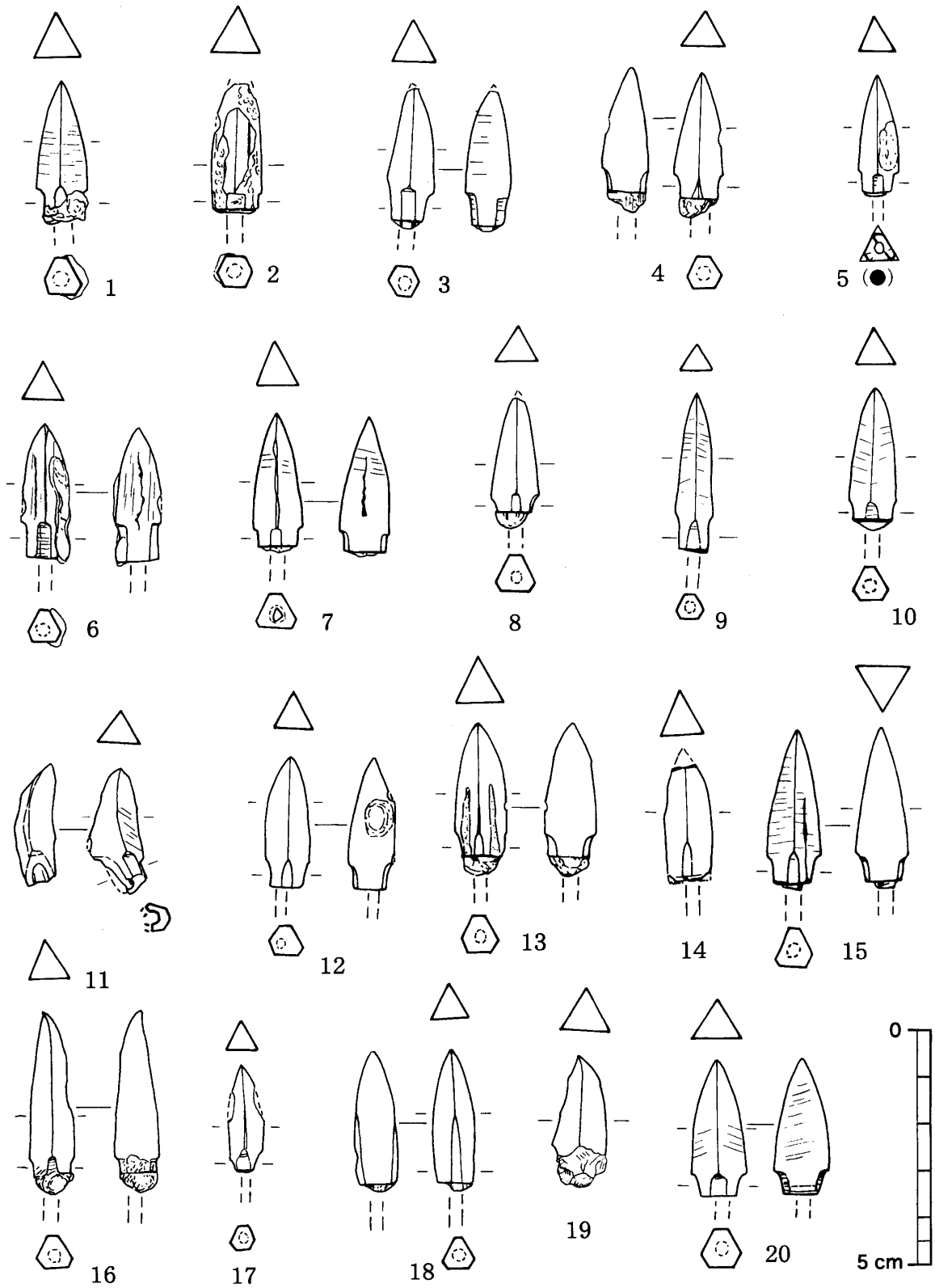


図3 楽浪土城出土の青銅鏃 (●は茎が青銅)

土したことがわかる。頭の外縁はやや曲線的で顎は3形である。茎は鉄製でその断面は円形である。頭の一面には内部の芯の腐蝕による亀裂が生じ錆が付着する。鎌長：2.9cm 頭部長：2.2cm 頭部幅：0.9cm 重さ：5.5g

25 (図3-13) F5-1区から6月19日(3次調査)に出土した。調査当時与えられた番号は3である。頭の外縁はやや曲線的で顎は3形である。茎は断面円形の鉄製である。頸には鉄芯の腐食により亀裂が生じ錆が付着する。鎌長：2.9cm 頭部幅：1.1cm 頸部長：0.4cm 重さ：8.6g

26 (図3-14) F4-5区から6月14日に採集されたものである。調査当時の整理番号は3である。頭の外縁は曲線的で顎は3形、頸は破失している。鎌の表面に付着した鉄錆から茎は鉄であったことがわかる。鎌の表面は土などが錆と一緒に固着し研磨痕等は観察できない。推定鎌長：2.9cm 頭部幅：1.0cm 頸部長：0.4cm 重さ：5.5g

27 (図3-15) Gトレンチの井戸から出土したものだが、出土日時に関する記録はない。頭部の外縁は曲線的で顎は3形である。頭部には鉄芯から生じた錆が固着する。頭部と頸b面の研磨は鎌と直交して行われた。鎌長：3.3cm 頭部幅：1.15cm 頸部長：0.5cm 重さ：8.0g

28 (図3-16) F3区から出土した。調査当時与えられた番号は10である。頭部の外縁はやや直線的で顎は2形である。発射された後、何かに当たったためか鎌の先端部が曲っている。鎌全面には土などが錆と一緒に固着し研磨痕等は観察できない。鎌長：3.5cm 頭部幅：0.95cm 頸部長：0.35cm 重さ：8.8g

29 (図3-17) G区の表土から6月11日に採集されたものである。頭部の外縁はやや直線的で、顎は3形である。茎は鉄で直径0.4cmを測るが芯部のみ残る。腐蝕が進んでおり研磨痕などは観察できない。鎌長：2.3cm 頭部幅：0.75cm 頭部長：1.9cm 重さ：3.3g

30 (図3-18) F2-4区から出土した。6月2日との注記があり3次調査時の出土であろう。頭部の外縁はやや曲線的で、顎は3形であるが段がない。茎は欠損しているが頸部下端の錆から鉄であったことがわかる。鎌長：2.90cm 頭部幅：0.8cm 重さ：7.1g

31 (図3-19) F5-4区から6月19日に出土した。調査当時与えられた番号は17である。頭部の外縁はやや曲線的で、顎は3形である。鎌の表面には土などが錆とともに固着し、研磨痕の観察はできない。頸には鉄錆が付着しており茎及び芯棒は鉄であることがわかる。鎌の先端部が曲っており実際使われた可能性もある。鎌長：2.7cm 頭部幅：1.15cm 頭部長：2.05cm 重さ：7.0g

32 (図3-20) F4-6区から6月14日出土した遺物で、3次調査時の出土であろう。調査当時与えられた番号は4である。頭部の外縁はやや曲線的で顎は3形である。頭部と頸部b面は鎌長軸方向と直交して研磨されている。頸の下端部は茎を中心としていくつかの方向からの研磨が認められる。したがって鑄型をはずして研磨する際にはすでに鉄茎が挿入されていたと思われる。鎌長：2.85cm 頭部幅：1.1cm 頭部長：2.35cm 重さ：8.6g

33 (図4-1) D8区から1935年4月24日出土したもので研究室の旧整理番号はA2である。



## 楽浪土城の青銅鏃

頭部の外縁はやや曲線的で顎は3形である。腐蝕が進んでおり研磨痕等は確認できない。欠失した茎は鉄で断面は円形である。鏃長：3.20cm 頭部幅：1.08cm 頭部長：2.10cm 重さ：7.3g

34 (図4-2) D4-1区から1935年10月8日出土したもので、研究室の旧整理番号はA32である。小形で頭部外縁は曲線的、顎は3形を呈す。茎は鉄だが欠損し痕跡だけが残る。鏃の先端部は少し曲っている。鏃長：2.50cm 頭部幅：0.75cm 頭部長：2.10cm 重さ：2.5g

35 (図4-3) D3-5区から1935年10月13日に出土した。研究室の旧整理番号はA34である。鏃頭の外縁はやや直線的で顎は3形を呈す。頭部の一面には鉄芯の腐蝕により生じた亀裂が鏃の先端まで及ぶ。茎は断面円形の鉄であるが、欠失しその痕跡のみが残る。鏃長：3.00cm 頭部幅：1.10cm 頭部長：2.45cm 重さ：4.7g

36 (図4-4) B'-7区から10月14日出土との注記があり、2次調査時の出土遺物である。調査当時に与えられた番号は6である。鏃頭の外縁は曲線的で顎は3形に近い。茎は断面円形の鉄だが欠損し芯部だけが残る。鏃長：2.90cm 頭部幅：1.05cm 頭部長：2.35cm 重さ：6.1g

次の図4-5から図6-2までの資料は基本的に三稜鏃だが、頭部の一面に一つの切り込みを持つものである。またこれらも基本的に頭部の断面が三角、頸の断面が六角でありこれに関する説明は省略する。

37 (図4-5) D4-1区から出土した遺物で1935年10月6日、すなわち2次調査の出土である。調査当時与えられた番号は8だが、研究室の旧整理番号はA28である。頭部の外縁は直線的で顎は2形である。頸の外表面には鉄の錆が付着しており鉄茎であったことがわかる。鏃表面は腐蝕が進み研磨痕等は観察できない。鏃の先端部は欠失している。残存鏃長：2.55cm 頭部幅：0.95cm 頭部長：0.60cm 重さ：6.5g

38 (図4-6) 頭部の外縁はほぼ直線的で顎は4形である。頭の切り込みは比較的中央に位置する。茎は青銅で铸造時の鑄型合わせ痕が残る。茎に残る合わせ痕から鑄型は上下2枚であったことがわかる。また鑄型の左右ずれが考えられる。鏃長：3.2cm 頭部幅：0.9cm 頭部長：2.6cm 切り込み長：1.0cm 茎部長：4.6cm 茎部厚：0.4cm 重さ：9.6g

39 (図4-7) E'11区から出土した資料で1935年9月18日の注記があり、2次調査の際に出土したことがわかる。研究室の旧整理番号はA9である。顎は4形である。青銅茎は一部欠失しているが、わずかに鑄型合わせ痕が残る。鏃長：3.15cm 頭部幅：0.80cm 頭部長：3.10cm 切り込み長：0.80cm 重さ：4.4g

40 (図4-8) D2-3区の表土から1935年9月20日に出土した。研究室の旧整理番号はA10である。頭部の外縁は直線的で顎は1形である。頭部の一面には切り込みがあるが、わずかに右に片寄る。茎の素材は明確でないが、部分的に錆が観察でき鉄である可能性が高い。鏃長：3.70cm 頭部幅：1.00cm 頭部長：3.20cm 切り込み長：0.75cm 重さ：8.2g

41 (図4-9) D3-1区から1935年10月6日に出土した。研究室の旧整理番号はA25である。

頭部の外縁は一部欠失している。やや曲線的で、顎は2形である。頭部の切り込みは平・断面共に三角で、少し左に片寄る。茎は断面円形の鉄で、欠失している。鏃の全面に鉄と青銅のさびが固着し研磨痕等は観察できない。鏃長：2.33cm 頭部幅：1.00cm 頸部長：0.45cm 切り込み長：0.60cm 重さ：6.2g

42 (図面4-10) D3-1区から1935年10月6日に出土したものである。すなわち2次調査の際に出土したものである。研究室の旧整理番号はA23である。頭部の外縁は緩かな曲線となり、顎は3形である。切り込みは平面と断面が三角形で鑄造面をそのままのこす。研磨痕は鏃の長軸方向に直交する。鏃長：3.35cm 頭部幅：1.0cm 頸部長：2.10cm 切り込み長：1.0cm 重さ：6.3g

43 (図4-11) D3-2区から1935年9月ないし10月17日出土との旧整理時の注記がある。調査当時の遺物封筒がないため確認はできない。研究室の旧整理番号はA40である。顎は4形で茎は青銅である。鏃には青銅錆や砂等が付着し研磨痕等は観察できず、鑄型の合わせ痕もみえない。頭部の先端が欠損している。鏃残存長：2.45cm 頸部長：0.50cm 茎部長1.90cm 重さ：5.7g

44 (図4-12) C'-1区から1935年10月4日に出土した。研究室の旧整理番号はA17である。頭部の外縁は直線的で顎は4形、茎は青銅である。仕上りの研磨痕は鏃と直交する。頭の切り込みはやや左に寄るが比較的深い。茎をわずかに残すが殆んどは欠失しており、また頭部の先端部も欠失している。残存鏃長：3.0cm 頭幅：0.9cm 残存茎長：0.3cm 茎厚：0.4cm 重さ：6.1g

45 (図4-13) D2-2区から1935年9月18日に出土したものである。研究室の旧整理番号はA8である。頭部の外縁は直線的で顎は4形である。茎は残っていないが、頸部の錆からみて鉄であろう。頭の切り込みはやや左に片寄る平面三角形である。仕上がり段階での研磨は鏃の長軸方向と直交して行われている。鏃長：3.50cm 頭部幅：0.75cm 頸部長：2.85cm 切り込み長：0.7cm 重さ：5.2g

46 (図4-14) D5-1区から1935年10月5日に出土したものである。調査当時与えられた番号はないが、研究室の旧整理番号はA21である。頭部の外縁は直線的で顎は2形である。頭部の切り込みは浅く左に若干片寄っている。頸部は断面円形の鉄で、その一部を残している。鏃全体には土と錆が固着し研磨痕等はみえない。鏃長：3.45cm 頭部幅：0.80cm 頸部長：2.10cm 切り込み長：1.0cm 残存茎部長：0.50cm 重さ：5.1g

47 (図4-15) 顎は3形で鉄の茎は欠失している。頭部には鉄芯の腐蝕により生じた亀裂がある。頭の切り込みは三角形で仕上がり段階で再び削られている。仕上りの研磨は鏃の長軸方向とは直交し行われている。鏃長：3.40cm 頭幅：1.20cm 頸部長：2.70cm 重さ：7.8g

48 (図4-16) D3-4区から1935年9月23日に出土した。顎は1形で鏃先端の一部が欠失した。茎は鉄で芯のみ残る。頭部の切り込みは平面三角形でやや左に片寄る。仕上がり段階の研磨は鏃の長軸方向と直交して行われた。残存長：3.75cm 頭部幅：0.98cm 頸部長：0.75cm 芯径：0.32cm 重さ：7.1g

楽浪土城の青銅鏃

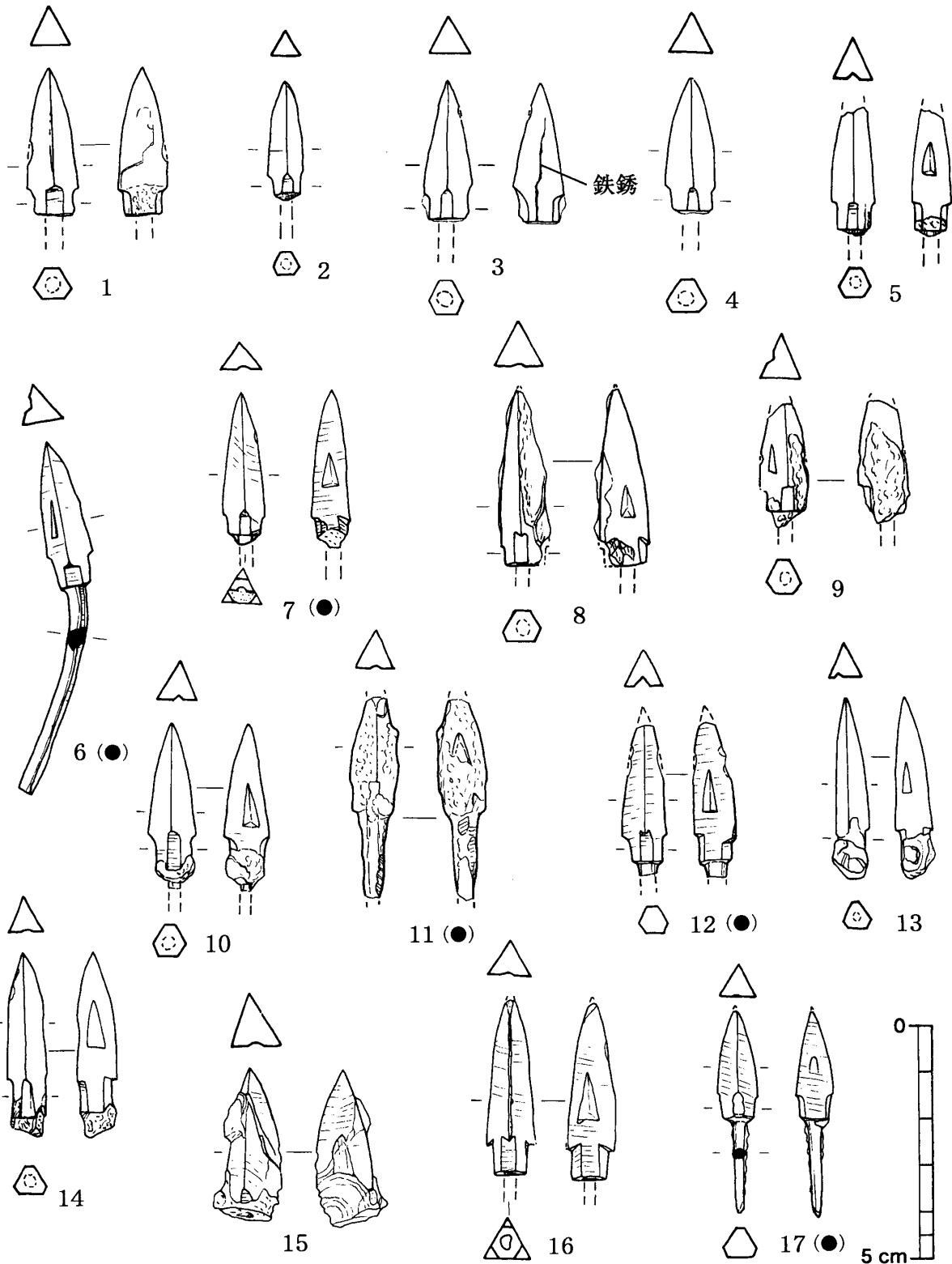


図4 楽浪土城出土の青銅鏃 (●は茎が青銅)

49 (図4-17) D 1-3 区の北側から出土した。頭部の外縁は曲線的で顎は4形である。頭の切り込みは浅くやや左に片寄る。茎は青銅で鑄型合わせ痕が茎断面の両方に残ることから鑄造は鑄型2枚で行われたことと推測できる。茎と頸部の下端面は鑄造面をそのまま残す。鏃の仕上がり研磨は鏃の長軸方向と直交して行われた。鏃長：2.40cm 頭部幅：0.80cm 茎部長：2.10cm 茎部径：0.28cm 切り込み長：0.30cm 重さ：4.2g

50 (図5-1) D 4-5 区から1935年10月1日に出土した。研究室の旧整理番号はA16である。顎は4形、頭部の切り込みは平面三角形で浅い。茎は青銅で欠失しているが、頸の下端部に鑄型合わせ痕がのこる。これも上下2枚の鑄型で作られたようである。切り込み面と頸部a面は仕上がり段階で研磨されてない。鏃長：3.40cm 頭部幅：0.80cm 頭部長：2.70cm 切り込み長：1.20cm 重さ：5.0g

51 (図5-2) D-2 区の塙の下、石の上から出土との注記がある。1935年10月15日出土で研究室の旧整理番号はA38である。鏃頭の外縁は曲線的で顎は4形である。茎部は青銅で欠失しているが、残存部に残る鑄型合わせ痕からみて鑄型は上下2枚である。仕上がり段階の研磨は鏃の長軸方向と直交して行われているが、頸と茎部は鑄造面をそのまま残す。頭部の切り込みは平面三角形で右側にずれる。鏃長：3.45cm 頭部幅：0.95cm 頭部長：2.85cm 切り込み長：0.90cm 重さ：7.6g

52 (図5-3) D 4-2 区から出土したものである。発掘当時与えられた番号は9、研究室の旧整理番号はA42である。鏃頭部の外縁は直線的で、顎は3形である。茎の素材は明らかではないが、頭部の一隅に残る鉄銹からみて鉄製の可能性が高い。切り込みは平面三角形で比較的浅い。研磨痕等は鏃表面に固着した土などにより観察できない。鏃長：3.45cm 頭部幅：0.80cm 頭部長：2.60cm 切り込み長：0.50cm 重さ：5.1g

53 (図5-4) D 4-1 区から1935年10月6日に出土した。調査当時の番号は8、研究室の旧整理番号はA26である。頭部の外縁は曲線的で顎は4形である。茎は欠失している頸部に付着した鉄銹からみて鉄であろう。仕上がり段階の研磨は鏃の長軸方向と直交して行われているが、切り込み面は研磨されてない。鏃長：3.40cm 頭部幅：1.0cm 頭部長：2.72cm 切り込み長：0.90cm 重さ：8.4g

54 (図5-5) 出土地点がはっきりしないもので報告書の図版18-7にあたる。頭部の外縁はやや湾曲する部分もあるが比較的直線に近い。顎は2形である。茎は鉄で欠失している。切り込みは平面三角形で比較的深いがやや左に片寄る。仕上がりの研磨は鏃の長軸方向と同じ方向に行われた。鏃長：3.45cm 頭部幅：1.0cm 頭部長：2.8cm 切り込み長：0.90cm 重さ：8.7g

55 (図5-6) D 3-4 区で1935年9月21日に出土した。研究室の旧整理番号はA11である。鏃頭の外縁は直線的で顎は2形である。茎は鉄で芯のみ残る。頭部の切り込みは平面三角形でやや左に片寄る。鏃の先端部には多数の気泡がみられる。鏃長：3.0cm 身部幅：1.0cm 鏃身上部長：2.48cm 切り込み長：1.0cm 重さ：6.9g

楽浪土城の青銅鏃

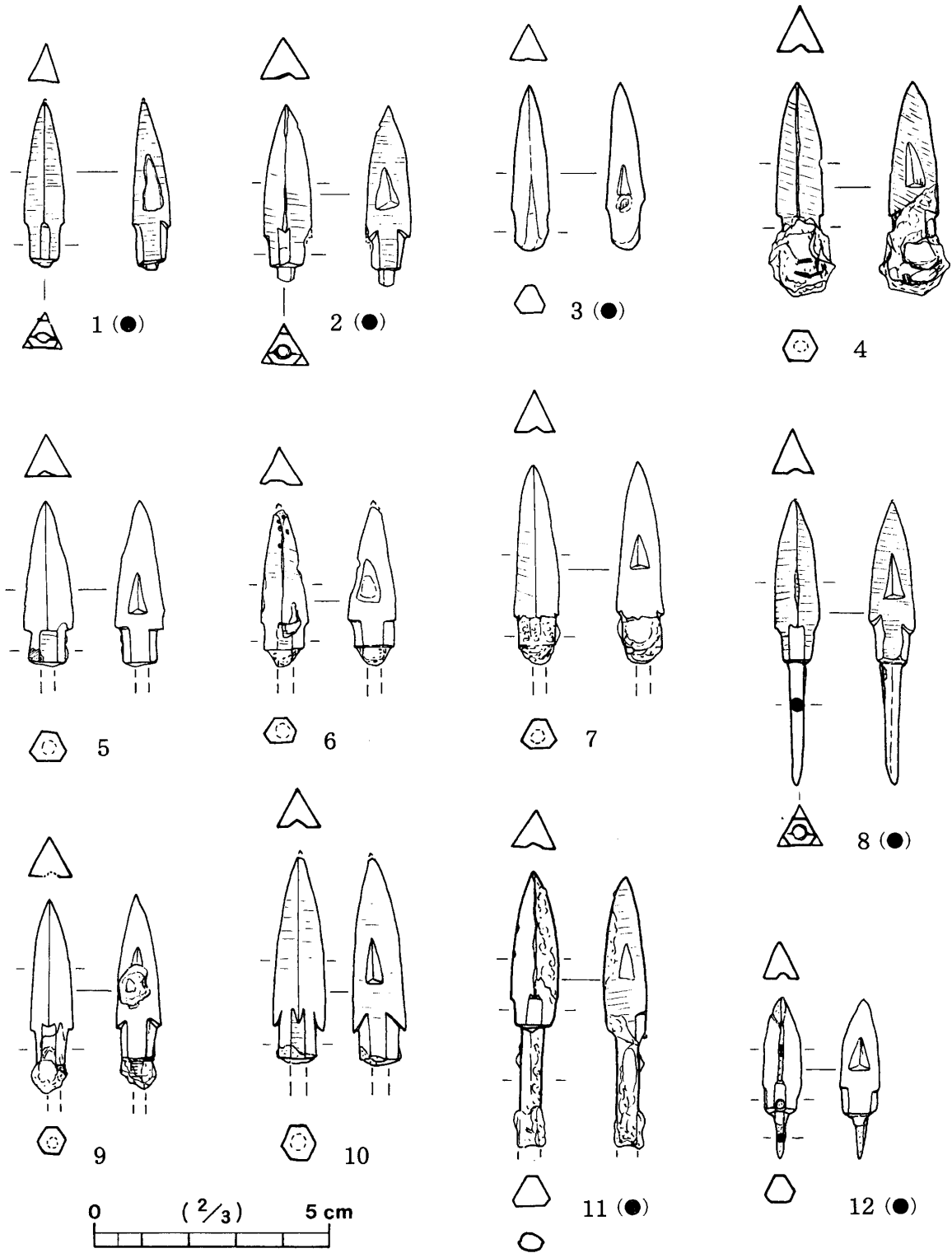


図5 楽浪土城出土の青銅鏃（●は茎が青銅）

56 (図5-7) D4-1区から1935年9月15日に出土した。調査当時与えられた番号は3, 研究室の旧整理番号はA5である。鍬頭部の外縁は曲線的で顎は1形, 茎部は鉄である。頭部の切り込みは平面三角形であるが鍬の長さにくらべ小さい。仕上がり段階の研磨は鍬の長軸方向と直交するが先端部は鍬と同じ方向である。鍬長: 3.85cm 鍬幅: 1.00cm 頭部長: 3.20cm 切り込み長: 0.65cm 重さ: 8.3g

57 (図5-8) 出土地点は不明だが報告書の図版18-2と同一遺物である。頭部の外縁は曲線的で顎は4形である。茎部は青銅製である。頭部の切り込み面と頸部下端面, そして茎部は研磨せず鑄造面をそのまま残す。茎部に残る鑄造痕から見て鑄型は上下二枚であろう。鍬長: 3.45cm 頭部幅: 0.93cm 頭部長: 2.80cm 切り込み長: 0.90cm 重さ: 9.1g

58 (図5-9) D4区出土で1935年の9月か10月の15日出土, 当時与えられた番号は2, 研究室の旧整理番号はA39である。頭部の外縁は曲線的で顎は4形である。茎部は鉄, 切り込みには銹が付着しわかりにくい, やや左に片寄る。仕上りの研磨は鍬の長軸方向と直交する方向である。鍬長: 3.50cm 頭部幅: 0.90cm 頭部長: 2.80cm 重さ: 6.8g

59 (図5-10) D3-5区から1935年10月15日に出土した。研究室の旧整理番号はA36である。鍬身部の外縁は曲線的で, 顎は典型的な1形である。切り込みは深く, やや左に片寄る。茎部は断面円形の鉄で, 芯部だけを残す。仕上がり段階の研磨は鍬の長軸方向と直交して行われている。鍬頭部長: 4.30cm 頭部幅: 1.15cm 頭部長: 3.20cm 切り込み長: 0.95cm 重さ: 10.8g

60 (図5-11) 報告書の図版18-3に該当するが, 出土位置は不明。頭部の外縁は曲線的で顎は4形, 茎は青銅だが一部欠失した。鍬全体に銹が生じ鑄造痕などは観察できないが, 鍬の長軸方向と直交する研磨痕が僅に残る。鍬長: 3.22cm 頭部幅: 1.0cm 頭部長: 2.3cm 切り込み長: 0.9cm 残存茎部長: 2.3cm 重さ: 9.2g

61 (図5-12) F2区から6月6日に出土した。調査当時の番号は12である。頭部の外縁は曲線的, 顎は4形で茎部は青銅である。頭部の切り込みは平面三角形で比較的深い。頭部には気泡が生じ研磨痕などの観察はできない。鍬長: 2.45cm 頭部幅: 0.8cm 頭部長: 1.9cm 切り込み長: 0.65cm 茎部長: 1.0cm 重さ: 4.2g

62 (図6-1) D5-1区から1935年10月7日出土。研究室の旧整理番号はA31である。鍬頭部の外縁は直線に近く顎は2形である。切り込みは平面三角形でやや左に片寄る。茎は断面円形の鉄で外縁の一部には木質痕が残る。鍬長: 2.30cm 頭部幅: 1.10cm 頭部長: 2.10cm 切り込み長: 0.95cm 重さ: 6.3g

63 (図6-2) F3-5区の表土下1m地点から6月7日に出土した。調査当時与えられた番号は7である。頭部の外縁は直線的で頸部には内部から生じた銹が付着し明確ではないが, 顎は1形のような。茎部は鉄で芯部のみ残存する。頭部の切り込みは平面三角で比較的深いが, 左に微妙に片寄る。仕上げ段階の研磨は鍬と直交する方向に行われた。鍬長: 4.10cm 頭部幅: 0.98cm 頭部長: 3.50cm 切り込み長: 2.50cm 重さ: 8.7g

楽浪土城の青銅鏃

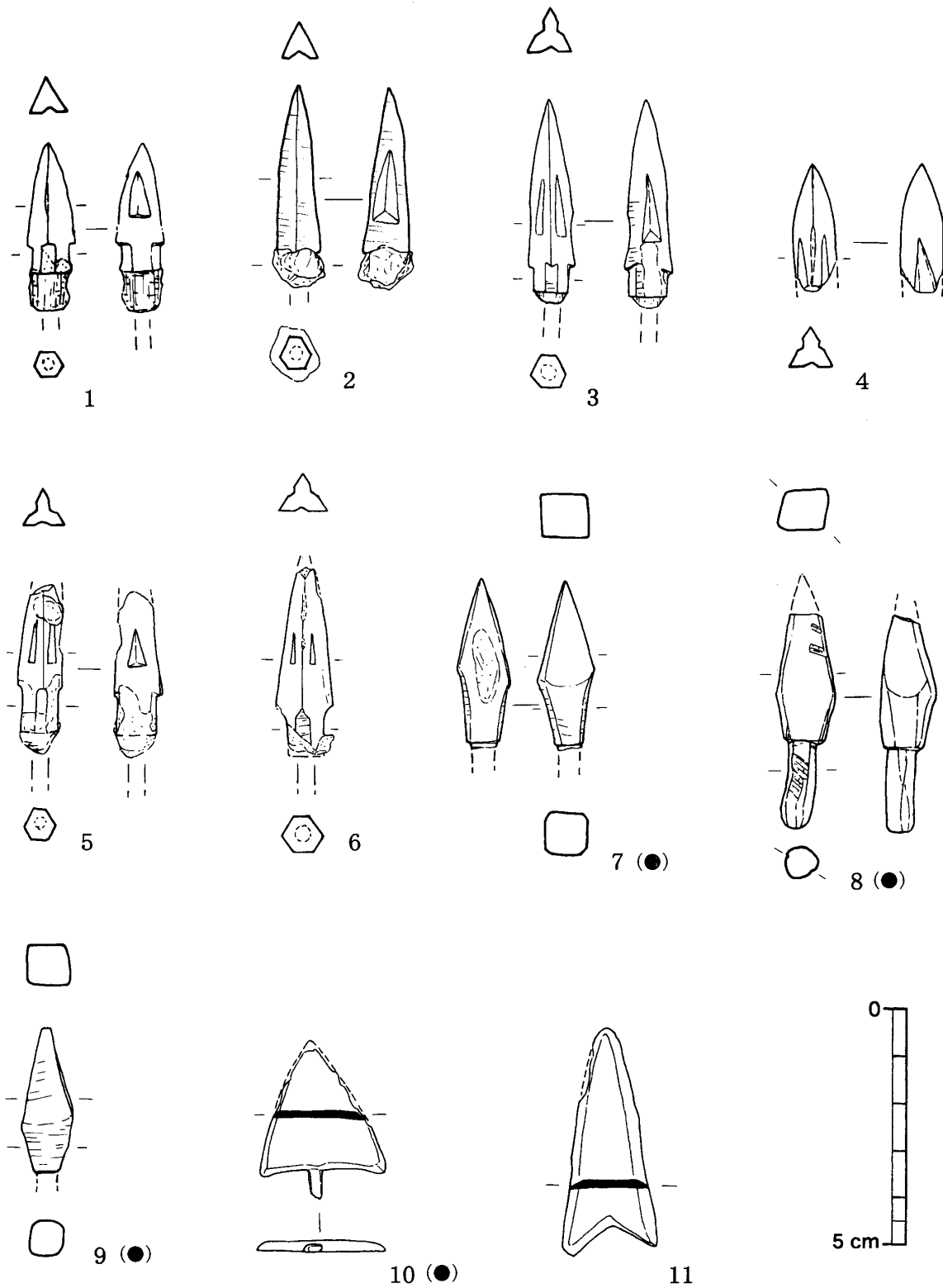


図6 楽浪土城出土の青銅鏃（●は茎が青銅）

次の図6-3から図6-6までの鍬は基本的に三稜式で、頭部の三面に各々一つの切り込みを持つものである。

64 (図6-3) 出土地点は不明である。頭部の外縁は直線的で顎は1形を呈す。茎部は鉄で断面は円形。頭部の切り込みは平面三角形で比較的深いが各々左に僅に片寄る。仕上げ段階の研磨は鍬身と直交して行われたが、切り込み面は鑄造面をそのまま残す。鍬長：4.05cm 頭部幅：0.96cm 頭部長：3.42cm 切込み長：1.3cm 重さ：8.5g

65 (図6-4) D2-2区から1935年9月16日に出土した。研究室の旧整理番号はA6である。鍬頭の一部のみで鉄芯の痕跡も残らない。三面の切り込みは深く、表面は腐蝕が進み研磨痕などは観察できない。残存長：2.5cm 重さ：3.8g

66 (図6-5) D2-5区から1935年10月15日に出土した。研究室の旧整理番号はA35である。頭部の外縁は直線的である。顎は4形、茎は断面円形の鉄である。頭部には気泡があり仕上げ段階の研磨痕は鍬の長軸方向と直交する。残存鍬長：3.35cm 頭部幅：1.0cm 頸部長：1.05cm 切り込み長：0.82cm 重さ：7.3g

67 (図6-6) D4-1区で1935年10月6日に出土した。研究室の旧整理番号はA29である。頭部の外縁は直線的で、顎は一部破損している部分もあるが基本的には3形である。茎部は断面円形の鉄製である。頭部の切り込みは一つはやや左に、一つは右に片寄るが残り一つはほぼ中央に位置する。残存状況は悪く破損した部分が多い。残存鍬長：3.80cm 頭部幅：1.11cm 頸部長：0.80cm 切り込み長：0.90cm 重さ：7.4g

#### 四稜鍬

1 (図6-7) D3-5区から1935年10月15日に出土した。研究室の旧整理番号はA37である。鍬頭は断面四角形で頸部の断面は隅丸の四角形である。茎は青銅だが破失している。仕上がり段階では斜めの研磨痕が認められる。鍬の一部には気泡が見える。鍬長：3.55cm 頭部幅：1.00cm 頭部長：1.80cm 重さ：11.9g

2 (図6-8) B-5区から1935年4月13日に出土した。研究室旧整理番号はA1である。頭部の断面は四角形で頸部は隅丸の四角形である。茎は青銅である。型はずしの後、仕上りの研磨は認められない。茎の鑄型合わせ痕から二枚の鑄型で鑄造したことがわかる。残存長：2.60cm 頭部幅：1.10cm 頸部長：1.10cm 茎部長：1.85cm 重さ：17.8g

3 (図6-9) G1区で埴と共に、6月5日採集したとの注記がある。すなわち1次調査時の出土である。頭部は断面四角形で頸部も断面隅丸の四角形だが、円形に近い。茎部は青銅で欠失しており、断面は円形である。頭部と頸部は仕上げの研磨が丁寧に行われている。鍬長：3.10cm 頭部幅：0.85cm 頸部長：1.20cm 茎部径：0.50cm 重さ：11.5g



### 平面三角鏃

1 (図6-10) 有茎式の平面三角鏃である。F 4-7区から6月13日に出土した。1次調査の出土品である。調査当時の遺物番号は2である。茎は小さく、鏃は薄い板状である。羽は片刃であり単合范による鑄造であろう。仕上がり研磨は認められない。鏃先端には気泡がある。全長：3.0cm 幅：2.65cm 重さ：3.5g

2 (図6-11) F 5-3区から6月20日に出土した。調査当時の遺物番号は6である。無茎式の三角湾入鏃で外縁は直線的である。側面の刃は片刃で単合范による鑄造である。全長：4.75cm 幅：2.0cm 厚さ：0.14cm 重さ：4.7g

### Ⅲ. 楽浪土城出土青銅鏃の検討

上に紹介した青銅の鏃は平面三角鏃を除くと、発射された矢が弧を描いて飛ぶ弓用ではなく直線的に飛ぶ弩用の鏃として相応しい。もちろん中国の曾侯乙墓の例のように三稜鏃が弓用として用いられた例もある(東京国立博物館 1992)が、殆んどが弩と共伴する。楽浪土城からも弩機の一部が、また楽浪墳墓からも三翼・三稜鏃と弩と一緒に出土する場合があります、楽浪郡でも弩用として使われたと考えてよいだろう。

中国で弩機がいつ頃開発されたかは明らかではないが、戦国・秦漢代には広く使われたようで、三翼・三稜鏃の分布範囲は漢帝国の影響力の及んだ殆んど地域から出土する。三翼・三稜鏃の起源については鳥居龍蔵がスキタイ遊牧民との関係を主張し(鳥居龍蔵 1932)、増田精一もこの説を支持している(増田精一 1970)、しかし林巳奈夫は中国内地の殷周時代以来の骨鏃に、その起源を求めている(林巳奈夫 1972)。

三翼・三稜鏃はその優れた命中率や飛距離によって戦国・漢代には最先端武器として扱われ、異民族世界に流出するのを厳しく禁止したようである(紙屋正和 1978)。これまで弩の機能や使用方法についてはいくつかの論考が出されているが、鏃そのものの分類や製作時期・展開・製作技法に関する研究は殆んどされていない。

#### 1) 楽浪土城出土青銅鏃の分類

楽浪青銅鏃の分類に関しては楽浪土城の発掘調査を担当した駒井和愛による研究がある。駒井は楽浪の青銅鏃を双翼鏃、三翼、三角錐鏃、四角錐鏃に分類し、文献との対比から三角錐形を「羊頭」、四角錐形を「拘陽」とし漢代の中国中原の青銅鏃と全く同じ性格のものだと主張した(駒井和愛 1938)。氏の分類は基本的には共感できるが、氏が双翼形として挙げた鏃は翼の中央に軸のない平面三角形のもので、弩の鏃としてふさわしくないものである。一方林巳奈夫は後漢代の『方言』に出てくる六種類の鏃を実物資料に当てようとした(図10-2参照)。氏は両翼鏃を「拘陽」に比定するが駒井は断面四角(四稜)鏃を「拘陽」と考えている(林巳奈夫 1976)。

しかしながらこれまで各々の鏃に関する細かい分類は殆んどされておらず、楽浪郡での青銅鏃

の時間的位置づけや変遷等の問題はもちろん、中国資料との比較による製作地検討等を試みるのに参考になる論考がないのが現状である。したがってここでは楽浪青銅鏃の整理作業の過程で得られた基礎知識を土台に楽浪青銅鏃に関する自分なりの分類を行い、また製作技法上の特性等に関して考えてみることにする。楽浪土城出土の青銅鏃の分類では『楽浪郡時代ノ遺跡』に載っている遺物も対象とする。また楽浪墳墓から出土する遺物も参考にする。

まず楽浪土城出土の青銅鏃は前章ですでに述べたように大きく両翼形、三翼形、三稜形、四稜形、

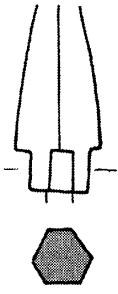
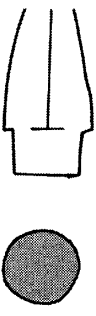
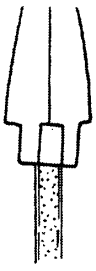
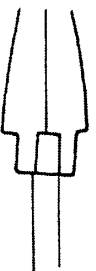
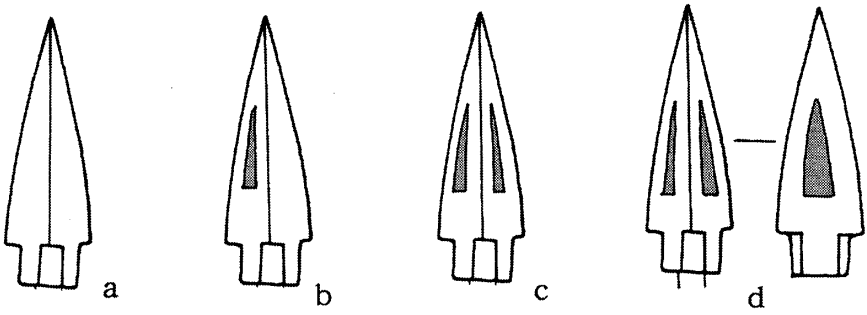
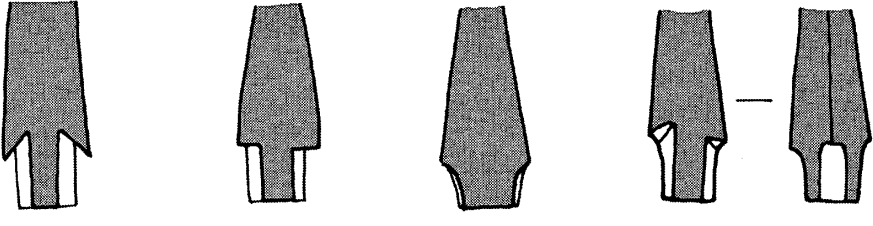
頸部形態	 <p>A : 断面六角形</p>	 <p>B : 断面円形</p>
茎の素材	 <p>I : 鉄</p>	 <p>II : 青銅</p>
切りこみの数		
頸の形態		

図7 三稜形銅鏃の分類基準

## 楽浪土城の青銅鏃

平面三角形に分類できる。三稜形は研究者によっては三角鏃あるいは三角錐鏃とも呼ばれるが、この場合扁平で平面三角の鏃との区別が難しくなるため三稜形と呼び、それにならって頭部の断面が四角形のを四稜形と呼ぶことにする。

両翼形の場合出土遺物の数が少ないため細かい分類は保留するが、大きく二つに分けられる。一つは鏃の軸が中空のもの、一つは軸が中実のものである。楽浪土城からは頸部断面が円形で中空の両翼形のみ出土するが、貞栢洞1号からは頸部の断面が六角中空の両翼鏃の出土例が報告されている(李 淳鎮 1964)。とりあえずここでは軸が中空のものを両翼鏃A、中実をBと分類しておく。もちろん各々の両翼鏃は翼や軸の形により細分できるものとする。

三翼鏃も同じく出土量が少ないため細かい分類は保留するが、両翼鏃と同じく頸部と鏃頭の中心部が中空であるものと中実であるものがある。各々をA、Bに分類しておくが、これらはさらに翼や軸、頸部の形によって細分できる。

三稜形の場合出土量が最も多いため、ある程度は細かい分類ができる。まず頸部の断面により六角形と円形に分けられ各々をAとBに分類する。頸部の断面が円形、すなわちB形の三稜鏃はその殆んどが頸部に顎がないのが特徴であるが、『楽浪郡時代ノ遺跡』には顎のあるB形三稜鏃の報告もある。さらにA形鏃は頭部切り込みの数、顎の形、茎部の素材を属性とし、さらに細かい分類ができる(図面7参照)。すなわち鏃茎部の素材には鉄と青銅の二つがあり各々をIとIIに分類する。また切り込みの数によってa・b・c・dに分けられる。aは切り込みのないもの、bは一つの切り込みをcは二つの切り込みを、dは三つの切り込みを持つものである。切り込みを二つ持つ三稜鏃は楽浪土城出土遺物には見られないが、貞栢洞1号出土品の中に2～3点の出土があるとの報告がある(李 淳鎮 1964)。最後に顎の形はすでに上で説明したように四つに分けられる。これを各々1、2、3、4と分類する。このように区分した属性の組み合わせにより型式の設定ができ、また各々の型式の鏃は長さや幅などの計測的属性によっていくつかに細分できるものと思われるが、ここでは触れない。

このように楽浪出土銅鏃を細かく分類する理由は小考では論じることができないが、今後中国資料との比較検討を通じ中国中原の青銅鏃の変化の流れのなかで楽浪青銅鏃の時間的位置を確認するための基本資料とするため、また楽浪現地で作られた青銅鏃を見分けるための基礎作業と考えているからである。

このような分類基準から楽浪土城出土銅鏃を各々型式分類したのが表1と2である。これらの鏃を両翼形、三翼形、三稜形、四稜形と分けその出土頻度<sup>4)</sup>をみると三稜鏃が圧倒的多数を占めることがわかる。三稜鏃の中にはA I a 3式、すなわち頸部の断面が六角形で茎は鉄、頭には切り込みがなく、顎が3形である鏃が特に多い。その次に多いのは同じA I式で頭に一つの切り込みを持つものである。またこのA I b式の場合4形の顎を持つものが多い。また茎が青銅であるA II式はその殆んどが4形の顎を備えているのが特に注目される。

楽浪土城で主に使われた青銅の鏃は三稜鏃で、三翼鏃の出土が多い遼東半島の牧羊城とは違いを

鄭 仁 盛

表1 楽浪土城出土各銅鏃とその型式

遺物番号		型式	法量 (cm, g)			出土位置	遺物番号		型式	法量 (cm, g)			出土位置
連番	図		長さ	頭幅	重さ		連番	図		長さ	頭幅	重さ	
1	2-1	両翼 A	?	1.65	4.2	C'-1	39	4-3	三稜 A I a3	3.0	1.10	4.7	D3-5
2	2-2	三翼 B	5.05	1.0	22.8	?	40	4-4	三稜 A I a3	2.90	1.05	6.1	B'-7
3	2-3	三翼 A	3.15	1.0	4.3	G25~26	41	4-5	三稜 A I b3	(3.2)	0.95	6.5	D4-1
4	2-4	三翼 B	(3.50)	1.1	5.7	D3-4	42	4-6	三稜 A II b4	3.2	0.9	9.6	?
5	2-5	三稜 B II	2.0	0.8	4.0	F4-7	43	4-7	三稜 A II b4	3.15	0.80	4.4	E'-11
6	2-6	三稜 B II	2.1	1.0	8.4	G1	44	4-8	三稜 A I b1	3.7	1.0	8.2	D2-3
7	2-7	三稜 B I	2.8	1.2	12.5	?	45	4-9	三稜 A I b2	(3.10)	1.0	6.2	D3-1
8	2-8	三稜 B I	2.8	1.2	11.9	Gの東	46	4-10	三稜 A I b3	3.35	1.0	6.3	D3-1
9	2-9	三稜 A II a4	3.1	1.25	9.1	D3-5	47	4-11	三稜 A I b4	2.9	1.0	5.7	D3-2
10	2-10	三稜 A I a3	(3.3)	1.1	9.4	?	48	4-12	三稜 A II b4	(3.40)	0.90	6.1	C'-1
11	2-11	三稜?	?	?	3.9	D5-2	49	4-13	三稜 A I b4	3.50	0.75	5.2	D'-2
12	2-12	三稜 A I a3	3.2	0.9	3.7	D4-4	50	4-14	三稜 A I b2	3.45	0.80	5.1	D5-1
13	2-13	三稜 A I a2	3.0	1.12	6.9	D4-1	51	4-15	三稜 A I b3	3.40	1.20	7.8	?
14	2-14	三稜 A I a3	2.85	1.1	6.4	C2-1	52	4-16	三稜 A II b1	(3.90)	0.98	7.1	D3-4
15	2-15	三稜 A I a3	(3.0)	1.0	6.9	D5の東	53	4-17	三稜 A II b4	2.40	0.80	4.2	D'-3
16	2-16	三稜 A I a2	(3.3)	0.9	5.3	D4-2	54	5-1	三稜 A II a4	3.40	0.80	5.0	D4-5
17	3-1	三稜 A I a3	2.9	1.05	7.6	?	55	5-2	三稜 A II b4	3.45	0.95	7.6	D4-2
18	3-2	三稜 A I a2	(3.3)	1.12	5.5	E'-14	56	5-3	三稜 A II b3	3.45	0.80	5.1	D4-9
19	3-3	三稜 A I a2	(3.0)	0.95	5.3	D2	57	5-4	三稜 A I b4	3.40	1.0	8.4	D4-1
20	3-4	三稜 A I a3	2.9	1.0	6.4	D3-1	58	5-5	三稜 A I b2	3.45	1.0	8.7	?
21	3-5	三稜 A II a4	2.5	0.8	2.9	D4-1	59	5-6	三稜 A I b2	(3.20)	1.0	6.9	D3-4
22	3-6	三稜 A I a2	2.75	1.1	6.9	?	60	5-7	三稜 A I b1	3.85	1.0	8.3	D4-1
23	3-7	三稜 A I a2	2.70	1.05	5.8	D4-1	61	5-8	三稜 A II b4	3.45	0.93	9.1	?
24	3-8	三稜 A I a3	2.70	1.0	5.4	F4-4	62	5-9	三稜 A I b4	3.50	0.90	6.8	D-4
25	3-9	三稜 A I a3	3.4	0.70	4.0	F5-1	63	5-10	三稜 A I b1	(4.4)	1.15	10.8	D3-5
26	3-10	三稜 A I a3	2.9	1.0	6.4	F5-5	64	5-11	三稜 A I b4	3.22	1.0	9.2	?
27	3-11	三稜 A I a3	(2.9)	1.0	3.6	F5-4	65	5-12	三稜 A II b4	2.45	0.80	4.2	F2
28	3-12	三稜 A I a3	2.9	0.9	5.5	F5-4	66	6-1	三稜 A I b2	2.30	1.10	6.3	?
29	3-13	三稜 A I a3	2.9	1.1	8.6	F5-1	67	6-2	三稜 A I b1	4.10	0.98	8.7	F3-5
30	3-14	三稜 A I a3	(2.9)	1.0	5.5	F4-5	68	6-3	三稜 A I d1	4.05	0.96	8.5	D5-1
31	3-15	三稜 A I a3	3.3	1.15	8.0	井戸	69	6-4	三稜 A ? d?	?	?	3.8	D2-2
32	3-16	三稜 A I a2	3.5	0.95	8.8	F3	70	6-5	三稜 A I d4	(3.90)	1.0	0.3	D2-5
33	3-17	三稜 A I a3	2.3	0.75	3.3	G表土	71	6-6	三稜 A I d3	4.4	1.11	7.4	D4-1
34	3-18	三稜 A I a3	2.9	0.8	7.1	F2-4	72	6-7	四稜	3.55	1.0	11.9	D3-5
35	3-19	三稜 A I a3	2.7	1.15	7.0	F5-4	73	6-8	四稜	3.60	1.10	17.8	B-5
36	3-20	三稜 A I a3	2.85	1.1	8.6	F4-6	74	6-9	四稜	3.10	0.85	11.5	G1
37	4-1	三稜 A I a3	3.20	1.08	7.3	D8	75	6-10	有基平面三角	3.0	2.65	3.5	F4-7
38	4-2	三稜 A I a3	2.50	0.75	2.5	D4-1	76	6-11	無基平面三角	4.75	2.0	4.7	F5-3

※ ( ) は推定

見せる（原田淑人 1931）。

## 2) 製作技法の検討

青銅鏃の製作技法は鑄型などの資料から確認できるものと思うが、残念ながら楽浪土城からは鏃の鑄型は出土してない。幸い一部の鏃には鑄造時の鑄型合せ痕や研磨痕が残り、ある程度の推測は可能である。

### 三翼形

三翼形の場合三方の翼をつくるためには三枚の鑄型が必要となるだろう。それはもし土型で2枚の鑄型を製作した場合鏃の原型から片方の鑄型がとれない問題が生じるであろうし、また石型の場合だと翼の部分の製作自体が難しく、もし鑄型が作られたとしても鑄込みが終ったあとは鑄型を壊さない限り製品が鑄型から取り外せない問題があるからである。

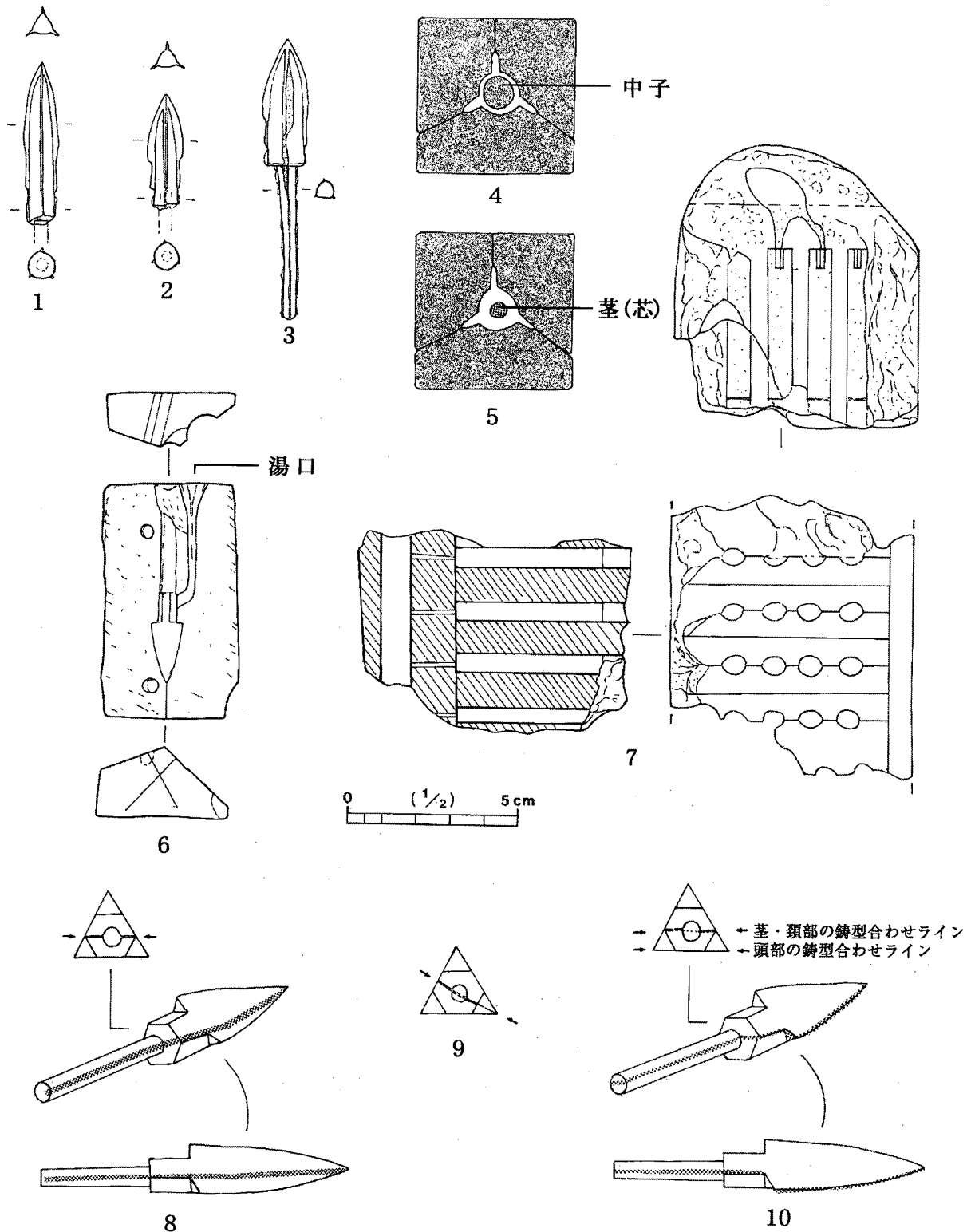
楽浪土城出土の図2-3・4の鏃は頸部に鑄型合わせ部分の張りが3方に残り、三枚鑄型による鑄造が認められる。また東京大学考古学研究室所蔵の牧羊城や邯鄲城出土の三翼鏃も頸部や茎に三方の鑄型合わせ痕が残るものが多い。図8-1, 2, 3は邯鄲城出土の三翼鏃で小考のB形に属する。そのうち図8-1は茎が鉄で軸と翼が長いタイプで、頸部は鑄造面をそのまま残す。茎の周縁三方には鑄型合わせによる張りがそのまま残ることから三枚による鑄造が考えられる。図8-2は茎が青銅で欠失しているが頭部と頸部は遺存度がよく鑄造痕が残っている。特に翼の下に該当する断面円形の頸にはその三方に鑄型合わせによる甲張りがはっきりと観察できることから、図8-4のように鑄型三枚による鑄造がうかがえる。もちろん茎となる青銅棒は別作りである。図8-3は鏃と茎部を同時に鑄造したもので素材は青銅である。頭部や頸部、また茎の一部には亀裂が生じている。頸と茎には鑄型合わせによる張りが残り、茎を含む鏃全体を三枚の鑄型を用いて同時に作ったことが分かる。

またベトナムの北部に位置するコーロア城から大量出土した頸部中実のB形三翼鏃を肉眼で観察したところ、頸部と茎部に3組の鑄型合わせ痕がはっきりと認められた。

したがって三翼鏃は基本的に三枚の鑄型で製作するものと見てよいと思われる。ただ茎が鉄（青銅）で頭と頸が青銅の場合は鑄造前に別途の鉄棒を作っておく必要がある。また図8-3の鏃、牧羊城、コーロア土城出土品のように茎部が青銅で同時鑄造が認められる場合は茎を含む鏃全体を三枚の鑄型で一気に作る。また頸部が中空であるA形は外型と共にかならず中子が必要となる（図8-4参照）。

### 三稜形 A I 式

楽浪土城出土三稜A式鏃はその殆んどが鑄造後の仕上げ段階で丁寧に研磨され、鑄造痕などが残る例が少ない。幸に中国の燕下都からこの三稜A式鏃を製作したと思われる鑄型が出土してお



1～3：邯鄲城出土三翼鏃（東京大学考古学研究室），4：三翼A形鏃の鑄造法（推定），5：三翼B形鏃の鑄造法（推定），6：燕下都出土三稜A I形鏃の石製鑄型，7：燕下都出土銅鏃の茎製作用の土製鑄型，8～10：楽浪土城出土A II形鏃の鑄型合わせ方法に関する模式図

図8 青銅鏃の製作技法に関する参考資料および模式図

り、この型式の鏃の製作技法を理解する上で参考になる（河北省文物研究所 1996）。燕下都の鑄型は武陽台村21号工房跡から出土したもので、鏃製作用の鑄型のみならず様々な種類の鑄型が共伴して出土した。燕下都出土の鏃鑄型は石製で、頸部断面が六角形である A 形鏃の鑄造用と思われる。また同じ遺構からは鏃の茎にあたる鉄棒製作用の鑄型も出土しており、三稜 A I 式鏃の鑄型である可能性が高い（図 8 - 6, 7 参照）。

鑄型の平面形態は長方形で断面は三角形で、三枚からなる鑄型だったようだ。あわせ面には鑄型を定位置にあわせるための円形の凹部が二カ所に作られている。側面にも鑄型を正位置に合わせるための線刻の交叉する合印がある。湯口は鏃の茎部に平行して作り湯道は頸部まで回し下げている。これは鏃の鑄造工程上、鉄（青銅）芯を鑄型にセットさせた場合、茎部分を湯口として利用できないという問題を解決するための工夫だったようだ。

楽浪土城から出土した A I 式の三稜鏃も燕下都の鏃と同じ方法で作られた可能性が高いが、楽浪土城の三稜鏃はその殆んどが仕上がり段階で細かく研磨され鑄型の枚数など製作技法の判断は難しい。ただ鉄茎をもつ鏃は燕下都同様茎を別鑄し、鑄型にセットして湯をながしこんで作ったと思われる。もちろん鏃を先に作り頸の下端部に孔をあけ用意した芯を挿入する方法も考えられるが、この方法は次のような理由から認められない。

まず本文の図 3 - 6, 図 3 - 7 のように鏃頭の亀裂からはみ出した鉄の錆からみて芯が鏃の先端部まで至るほど深く挿し込まれているものがある。すなわち鏃のみ鑄造した後、茎を挿し込むため鏃頭まで穿孔することは常識的に考えて難しい。また図 3 - 7 のように鏃の頸の下端部に挿し込まれた茎の断面が円形ではなく三角形に近いものがあることも根拠になる。円形ではなく三角状に穿孔することは不可能だと思われるからである。さらに鏃頭や頸部の a・b 面全体が細かく研磨されているのに頸部下端面は研磨されていないものがあることも指摘できる。鏃のみ作り研磨、頸部下端面穿孔という工程を経たと想定する場合、鉄芯を挿し込む前に頸部下端面も研磨しておくのが自然である。頸部下端面を研磨してない事から鑄造後の仕上げの段階にはすでに頸部下端部に茎がセットされ、下端面の研磨が困難だったことが分かる。最後に一部頸部下端面を研磨した鏃も茎を中心にその周りだけを複数の方向で研磨されていることも指摘できる。仕上がり段階にはすでに茎がセットされ、頸部下端面を一方向で一気に研磨することができなかったからであろう。

またこの型式の鏃にも 4 形の顎を持つのが一部含まれる。4 形の顎は顎部に段を持つ上下 2 枚の鑄型で鏃を作るための工夫だったと思われるが、これについては次の三稜 A II 式の製作技法を説明する際に詳しく見ることにする。

### 三稜鏃 A II 形

上で述べたように楽浪土城から出土した三稜 A II 式の鏃は茎や頸の下端部に鑄型合わせ痕を残すものが多い（図 4 - 6, 4 - 7, 5 - 1, 5 - 2, 5 - 8 参照）。これらの鏃に残る鑄型合わせ痕は茎両側面の中央に位置するから上下 2 枚の鑄型による鑄造であることがわかる。それに頸部の

下端面にも鑄型合わせ痕が残り茎部の合わせ痕と互いにつながっているのも含まれる（図5-1, 5-2参照）。茎部のみならず顎の下端面の鑄型合わせ目も水平につながっていることは鑄型二枚による鑄造, また鏃と茎部との同時鑄造を物語る。これは茎となる青銅の棒を鑄型2枚で別鑄しこれを別の鑄型にセット, 湯を流し込んで製作した秦始皇兵馬俑1号坑出土の三稜AⅡ形鏃とは違う方法の作り<sup>5)</sup>である（町田章1983）。

上でも説明したように上下2枚の鑄型で三稜鏃を作ることは難しい。それは図8-8の模式図で見ると茎と顎の両側面の中央に残る鑄型合わせ痕から直線をひくと頭部の下2/3の高さに鑄型合わせラインがつながってしまい, 原型から鑄型が抜けにくいという問題が生じるからである。石型の場合でも鑄込みが終った後に, 型を壊さない限り製品が取り出せない問題がある。鑄型2枚から三稜鏃を作るには図8-9のような斜めの割れ方が考えられるが, 実際の楽浪土城出土資料を観察する限りそれは認められない。ならばどのようにして上下2枚の鑄型で鏃が作られたのか。ここでヒントになるのが顎の形である。すなわち鑄型2枚鑄造が認められるAⅡ式鏃は4形の顎を持つ特徴がある。顎4形の特徴は図4-8, 4-17で見ると鑄型合わせ痕を水平にし, また平らな面を下に置いた場合両下方の顎が同じく斜めになる点にある。また上の顎は垂直に立つものが多い。したがって上下の鑄型は図8-10の模式図のように, 顎のところで段を作り頭の部分は下の両稜で鑄型が互いに合うようにしたことが推測できる。このように鑄型に段を作ると土型は原型から, 石型は製品から取ることが可能になる。また一つの顎が傾斜を持たずに垂直に立つ理由も説明できる。

三稜AⅠ型の鏃も4形の顎を持つものは, AⅡ型同様茎になる鉄棒をセットし上下2枚の鑄型で鑄造した可能性がある。

#### 四稜鏃

青銅四稜鏃は全て青銅の茎を持つ。茎は別作りではなく鏃と同時に鑄造したものである。図5-8は矢印のところに鑄型合わせ痕がわずかに残り, 鑄型のあわせ方を示唆する。

#### 平面三角鏃

平面三角鏃も鑄造で作られた。刃部は片刃であることから, 鑄型の片方だけを彫って鑄型を合わせ, 湯を流したことがわかる。湯口の位置は判断できない。仕上がり段階の研磨は認められない。二つとも青銅器製作工房があったと思われるF区から出土したのが目を引く。

#### 3) 土城内青銅鏃の出土位置

楽浪土城から出土した青銅鏃の出土位置をトレンチ及び遺構配置図に落したのが図9である。上で一部出土位置がわからなかった青銅鏃に関しては, 報告書のトレンチ別出土遺物目録と注記のある資料のトレンチ別数量との比較検討から完全に正確ではないまでも, ある程度の出土位置は確認できる。出土地点不明の青銅鏃は全部11点で, 内6点はF1区からの出土である。またF2とG



楽浪土城の青銅鏃

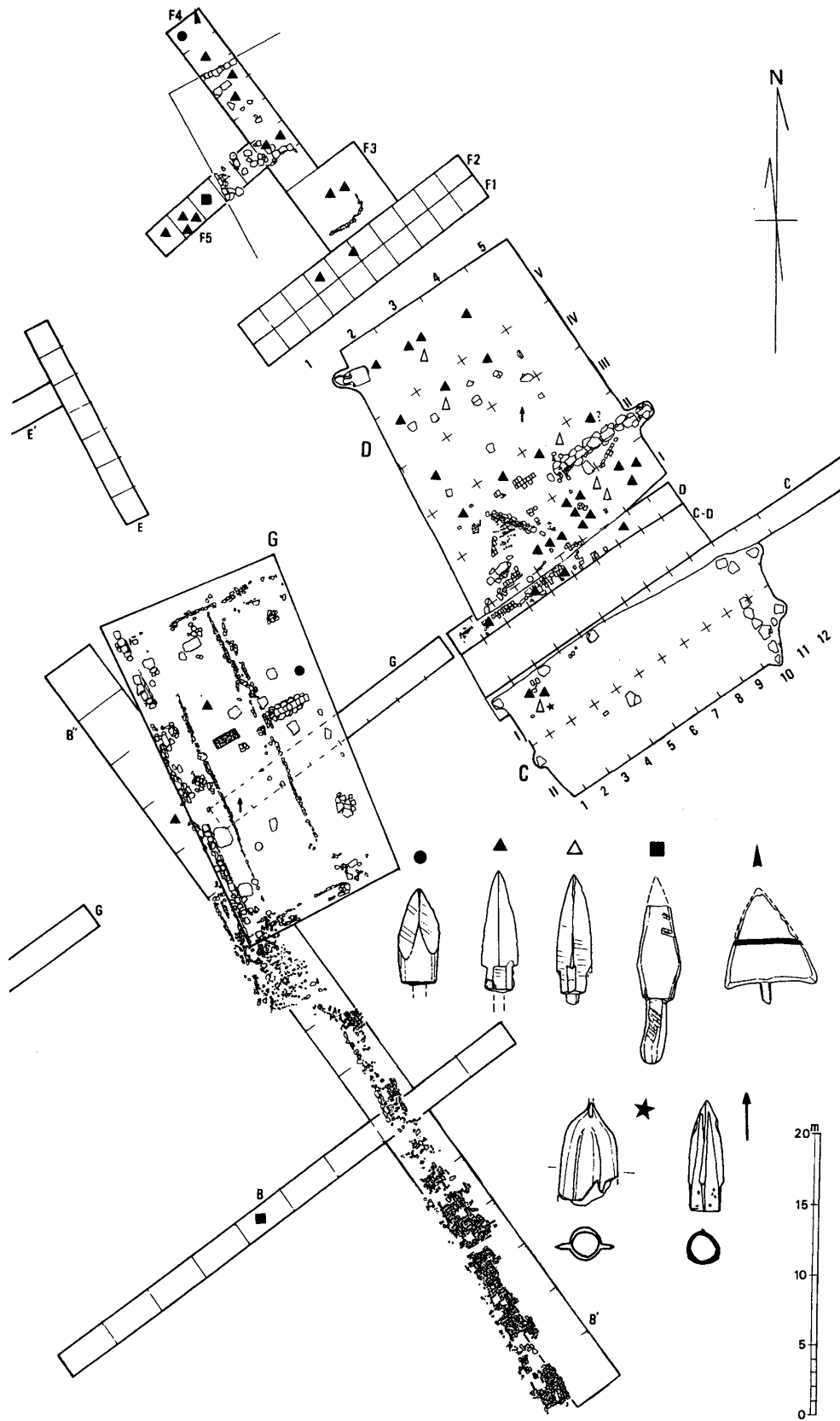
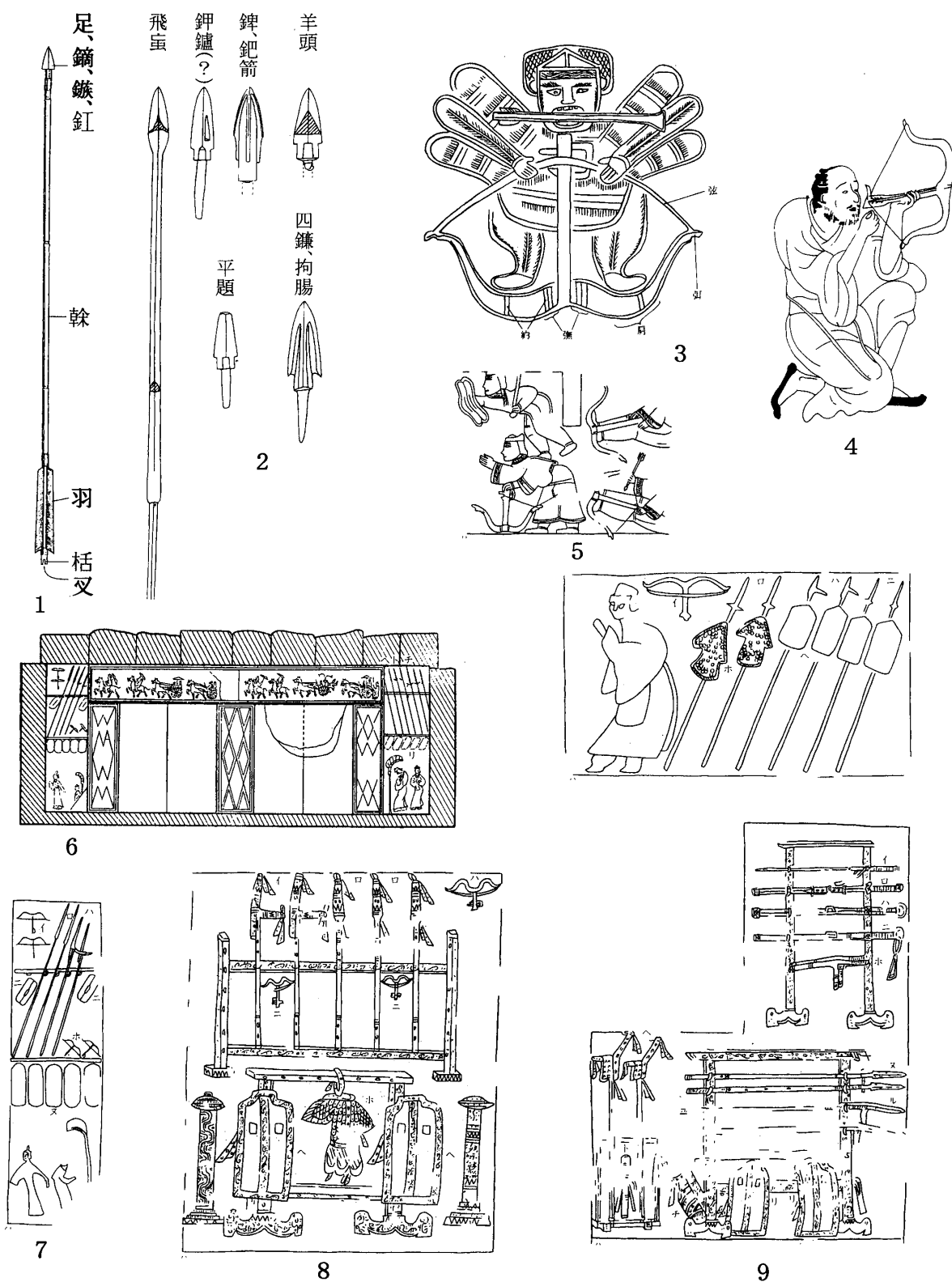


図9 楽浪土城における青銅鏃の出土地点



1：矢の各部名称（足，釘，鏃等は中国戦国時代の名称），2：林巴奈夫による『方言』の六種の鏃，3～5：弩の使用方法，6～10：漢代の武器庫描写（林 1976から再引用）

図10 各種参考資料

トレンチから各々2点、Dトレンチからも1点が出土したようだ。

図9を見てわかるように青銅鏃が最も集中する区域はD区で、その次がF区である。特にD地区に鏃の出土が多いのは注目すべきである。D区には青銅鏃以外にも武器類の出土が集中する場所でもあるからだ。剣の鞘附属金具はもちろん弩機の牙、また矛あるいは戈の石突等青銅武器類がほとんどD区から出土した。また未報告であるが鉄製の鏃もD区とF区に集中して出土する。

図10-6, 7, 8, 9の画像石資料から見るように漢代の拠点土城には武器庫が備えられたようで、楽浪土城でもこのD区の何処かに武器庫が存在した可能性がある。さらに敵が城壁に接近するのを防ぐために製作したとおもわれる鉄蒺藜が城壁の外側ではなくD区から出土することもD区の何処かに武器庫が存在したという推定を裏づける。

しかしながらD区は塼を敷いた遺構と排水施設等の切り合い関係から、少なくとも三回以上の大規模な建物の建て替えが行われたらしく、武器庫としての遺構の確認はもちろん同時期遺構の確認も難しい。

またF地区に青銅器の製作工房が存在したのは前稿で明らかにした(鄭仁盛 2001)。F地区ではA I型式の鏃の出土も多いが、使用済みで再加工が必要な青銅鏃(図3-11, 図3-16, 図3-19)の全てがこのF地区から出土したことは興味深い。F地区には前稿で紹介した青銅器鑄造関連の遺物以外にも、青銅鏡などの破損した青銅製品の出土が集中する。それに青銅器の補修に使われた青銅片もF地区の出土である。したがってF地区から出土する青銅鏃は使用済で再加工、再鑄造の目的で集めたものである。可能性もある。鑄造後仕上がり段階での研磨痕のない平面三角形の鏃がF地区から出土することも注目できる。

#### IV. 土城出土青銅鏃の時間的位置

##### 1) 中国における青銅鏃の展開

楽浪土城出土青銅鏃の時間的位置を検討するためにはまず中国における青銅鏃の変遷を見てみる必要がある。中国における青銅鏃の変遷に関しては林巳奈夫の研究が参考になる(林巳奈夫 1972)。林の整理によると中国の青銅鏃は両翼鏃からはじまる。頭や頸が細長い三翼鏃は大体春秋時代に登場し、戦国時代になると短くなるという型式変化を見せる。A式の三翼鏃、特に軸に比べ翼が大きいものは戦国時代の前期に登場したらしく、楽浪土城出土の三翼B式に近い鏃も戦国時代中期からの出土例がある。三稜鏃も戦国時代の中期には確実に登場したようだが、後期になると出土例が増える。しかし残念ながら中国の場合楽浪郡の存続時期である漢代には青銅鏃の副葬伝統は殆んどなくなってしまい楽浪青銅鏃との比較あるいは並行関係の設定は難しい。ただ今の段階で参考になるのは三稜鏃は三翼鏃に後出する型式でしばらくは共存するが、三翼鏃の製作が先に途絶えるという事実である。また三翼鏃はA式の方がB式よりも出現が早かったのも参考になる。

## 2) 楽浪墳墓出土青銅鏃の検討

楽浪郡時代の墳墓からはいくつか青銅鏃、または弩機等の出土例があり、製作・使用時期がはっきりしていない土城出土青銅鏃の時間的位置を確認するためには一応目を通す必要がある。

### ① 梨峴里板榔墓

平壤市寺洞区域に位置する梨峴里板榔墓からは三稜 A 1 式鏃 2 点と A 式の三翼鏃が 3 点、B 式三翼鏃 3 点が出土した。共伴遺物としては古式の細形銅劍や銅鉞、弩機等がある。A 式は三翼鏃のなかでも古式だという林の整理を尊重すれば、楽浪遺跡から出土する青銅の鏃のなかで一番古い資料となる。この墳墓からは土器の出土がないこともあり、楽浪設置以前の資料である可能性もある。楽浪郡設置以前、戦国並行期にはすでに韓半島の北部地域に三稜鏃がもたらされている。多量の戦国系鉄器と三稜 A I b 2 式鏃が共伴した謂原龍淵洞遺跡（榎本杜人 1980）がそれである。

### ② 土城洞 4 号

平壤市楽浪区域に位置する土城洞 4 号からは両翼鏃と三稜鏃がまとまって出土した。青銅鏃に関する詳しい説明がないため明らかではないが図録の写真を観察すると両翼 A 式が 5 点、三稜 A I ? a 式が 1 点である。共伴遺物としては細形銅劍、劍把頭飾、鉄長劍、滑石混入深鉢形土器、車軸頭等があり、高久健二は楽浪 1 期（高久健二 1996）に編年するが、鉄長劍等の副葬もあり 2 期に下る可能性もある。

### ③ 貞栢洞 1 号墳

貞栢洞 1 号墳では 15 点の青銅鏃と弩機の出土報告がある。報告では両翼鏃が 6 点、三稜鏃が 9 点だという。報告書の説明を参考に小考の分類にあわせると、A I a 2 式の鏃が 4 点、A I c 1 式が 1 点、A I d 2 式が 4 点となる。両翼鏃は全て A 式で頸の断面形は八角形だという。中には鏃の柄となる木質が茎部に残るものがあり、鏃柄を装着した状態での副葬と考えられる。また A I c 1 式の鏃は図録の写真を観察すると頭部の切り込みが平面三角形ではなく楕円形で、沖縄の宇堅貝塚出土鏃との類似性が指摘できる。共伴遺物として滑石混入深鉢形土器、細形銅劍、銅鉞、鉄刀、銅鐸、非漢式系の車馬具等があり、高久健二編年の楽浪 2 期に該当する。

### ④ 貞栢洞 37 号

遺跡は平壤市楽浪区域貞栢洞に位置し弩機や青銅鏃、弓などが出土した。青銅鏃は図録に写真 4 点が載せられ、内 2 点は三稜 A I b 1 式、他は茎の素材や切り込みの数が不明だが頸が 3 形であり、私の A ?? 3 式に該当する。共伴遺物としては鉄製長劍、車輿具、滑石混入深鉢形土器、瓦質短頸壺、異体字銘帯鏡、地節 4 年（紀元前 66 年）銘の漆器などがあり楽浪 2 期に編年される。

### ⑤ 石巖里 200 号

石巖里 200 号では銅鏃と鉄鏃が弩機と共伴して出土したというが、鉄鏃の型式はわからない。青銅鏃は三翼 A 式が 9 点もあり軸と頸は断面円形で鉄の茎をもつタイプである。鏃の長さ、翼の形、頸の長さとも幅がほぼ完全に一致することから同一原型からの鑄型製作、あるいは同一范による鑄造の可能性もある。また小形の三稜 A I a 3 式の銅鏃も多数出土している。共伴遺物としては鉄製

## 楽浪土城の青銅鍬

長剣，蓋弓帽，壺形土器，方格規矩四神鏡等があり楽浪3期に編年できる。

### ⑥雲城里カマルメ1号

黄海南道殷栗郡に位置する雲城里カマルメ1号では青銅の弩機と共にいくつかの鉄鍬が出土した。鉄鍬は破損が激しいが四稜鍬の可能性が高い。遺構は単葬の木槨墓で鉄大刀，鉄刀子，石製の硯，石英・長石混入の大甕（白色土器）などが出土した。白色土器甕の出土から楽浪3期に編年できるものと考えられる。

### ⑦所羅里土城

築造年代が楽浪郡設置以前とされる咸鏡南道の所羅里土城からは両翼A式，三稜A I a 2とA I a 3式，A I d 2式，A I b 2式銅鍬が出土した。咸鏡南道は漢四郡の一つである臨屯郡が置かれた地で後には嶺東七県となるが，紀元後1世紀前半には廃止となる。したがって所羅里土城から出土した銅鍬は紀元後1世紀前半を下限とする可能性がある。

以上で図面あるいは写真を通じ出土鍬の型式のわかる遺跡，遺構を中心に挙げてみた。

### ⑧その他

さらにここでは型式ははっきりしてないが，鍬あるいは弩機の出土事実が明らかな墳墓を高久健二（高久健二 1995）の楽浪古墳編年案を基準として見ることにする。

#### ・楽浪1期（紀元前2世紀後葉～紀元前1世紀前葉）

葛岷里化石洞：弩機出土－細形銅劍，銅鉞，滑石混入深鉢形土器，鉄斧，鉄矛など共伴

金石里木槨墓：弩機出土－細形銅劍，鉄斧，鉄鑿，滑石混入深鉢形土器，瓦質短頸壺など共伴

石巖里古墳：弩機出土－細形銅劍，鉄戟，馬面，車輿具，滑石混入深鉢形土器共伴

#### ・楽浪2期（紀元前1世紀中葉～紀元前1世紀後葉）

石巖里52号：弩機出土－鉄長剣，装身具，異体字銘帯文鏡，虺竜文鏡共伴

石巖里219号：弩機，銅鍬出土－鉄長剣，鉄刀子，銅矛，鉄矛，小型壺，甕など出土

石巖里257号：銅鍬出土－鉄長剣，鉄刀子，鉄戟，車輿具，帯鈎，異体字銘帯鏡，方格規矩鏡，小形壺，滑石混入深鉢形土器

貞栢洞2号：銅鍬出土－細形銅劍，鉄長剣，馬面，馬具，車輿具，異体字銘帯文鏡，瓦質短頸壺，滑石混入深鉢形土器，ガラス玉など

貞栢洞62号：銅鍬出土－鉄長剣，環頭大刀，車輿具，ガラス玉，瓦質短頸壺，滑石混入深鉢形土器など共伴

貞栢洞88号：弩機出土－細形銅劍，鉄長剣，車輿具，瓦質短頸壺，青銅容器，滑石混入深鉢形土器

#### ・楽浪3期（紀元後1世紀前葉～紀元後1世紀中葉）

石巖里194号（丙墳）：銅鍬－鉄長剣，馬具，玉類，青銅容器，方格規矩鏡，内行花文鏡，瓦質短頸壺，白色土器甕など

石巖里212号：弩機出土－鉄長剣，馬具，装身具，各種漆器，異体字銘帯鏡，瓦質土器壺，石英

長石混入（白色）甕

貞栢洞84号：弩機出土－鉄鑿，鉄斧，瓦質壺，瓦質短頸壺，滑石混入深鉢形土器，石英長石混入甕

貞栢洞127号：弩機出土－鉄長劍，馬具，玉類，銅小壺，方格規矩鏡，異体字銘帶鏡など

貞栢洞5号：弩機，鏃柄－馬具，各種装身具，青銅容器，方格規矩鏡，滑石混入深鉢形土器，瓦質壺，瓦質短頸壺

貞栢洞10号：弩機－鉄長劍，馬具，鉄斧，青銅容器，方格規矩鏡，瓦質短頸壺，石英・長石混入甕

・楽浪4期（紀元後1世紀後葉～紀元後2世紀）

石巖里120号：弩機－鉄戟，ガラス玉などの装身具類，五銖銭，竈形土器，石英長石混入甕

貞栢里59号：鉄鏃－鉄斧，玉類などの装身具類，漆器，方格規矩四神鏡，瓦質壺，甕形土器など。

・楽浪5期（紀元後3世紀前葉～紀元後3世紀中葉）

大洞江面甲墳：弩機－鉄鏡，鍍金金具などが共伴

道済里50号：弩機（小形）－環頭大刀，車輿具の明器，方格規矩鏡，鉄鏡，盤形土器，土製器台，瓦質短頸壺など

貞栢里1号（大洞江面1号）：鉄鏃－漆器片，土製案，椀，耳杯，五銖銭，貨泉，鉄釘

貞栢里3号（大洞江面3号）：鉄鏃－鉄長劍，銀釧，銀環，神獸鏡，盤竜鏡，五銖銭

金大里3号：鉄鏃－瓦質壺

・楽浪5期以後（紀元後3世紀後葉～紀元後4世紀中葉）

平壤駅前古墳：鉄鏃

以上見てきたように楽浪墳墓出土の青銅鏃はその一部を除くと図や写真の報告がなく，各々の型式を把握することは困難である。型式のわかる良好な墳墓資料があまりにも少ない現状で青銅鏃副葬の変遷を論じるには確かに無理がある。しかしながら大まかな流れの理解には資するところもあるだろう。

韓半島の西北地域には謂原竜淵や梨洞峴里出土資料から見て，楽浪郡が置かれる前にもすでに青銅鏃や弩機が流入していた可能性がある。この時期に確認できる青銅鏃には三稜 A I b 2 と三翼 A 式と B 式がある。

また両翼鏃は所羅里土城や土城洞4号の例から楽浪3期まで使用あるいは副葬に使われたようだ。三翼鏃の場合 A 形，特に翼の大きい鏃は楽浪設置以前あるいは楽浪1期まで使われた可能性がある。三翼鏃 B 式は石巖洞200号で見るように楽浪3期にも墳墓に副葬される。同范で作られた可能性のある鏃がまとまって副葬されていることから楽浪3期まで幅広く使われた可能性が高い。また三稜鏃も確かに楽浪3期まで確実に墳墓への副葬が確認できる。

もう一つ興味深い事実は楽浪3期になると鉄鏃の副葬が認められることである。さらに楽浪4期

と5期になると墳墓副葬の鏃は大部分鉄鏃になっている。もちろん墳墓出土鉄鏃はその型式のわかるものが少なく、弓専用の鏃である可能性も排除できない。しかし3期以後にも弩機の墳墓副葬が確認でき楽浪郡での弩の使用は継続したらしい。したがって弩の鏃は楽浪3期からその素材が青銅から鉄に交替していった可能性もあるといえよう。

まだ未報告であるが、楽浪土城からも多量の鉄鏃が出土しており、中には青銅鏃と同じ型式の弩専用の鏃も含まれる。弩専用の鉄鏃には四稜鏃と三稜B式の出土が多い。また東京大学考古学研究室保管資料の中には見られないものの、韓国の国立中央博物館所蔵の伝楽浪土城出土遺物の中には鉄製のA I b式鏃も確認できる（国立中央博物館 2000）。『楽浪郡時代ノ遺跡』に紹介された楽浪土城出土遺物にもA I b式の鉄鏃が含まれている。以上の点から楽浪郡で弩専用の鏃が青銅から鉄に代替したと考えると、鉄鏃で同一型式が存在する四稜式・三稜B式の銅鏃が比較的時期の下る可能性が出てくるが、断定はできない。

結局楽浪3期から青銅の鏃が鉄の鏃に変わりはじめ、楽浪4期以後になると鉄鏃のみで副葬する例が多いことを参考にすれば、楽浪土城から出土する殆んど銅鏃は楽浪3期、あるいは鉄鏃との共存期間を勘案すれば4期の前葉頃を下限とする可能性がある。また土城からは典型的な三翼A式鏃の出土がない点は楽浪土城の築造年代を考える上で示唆するところがある。

## V. 楽浪郡における青銅鏃生産の有無について

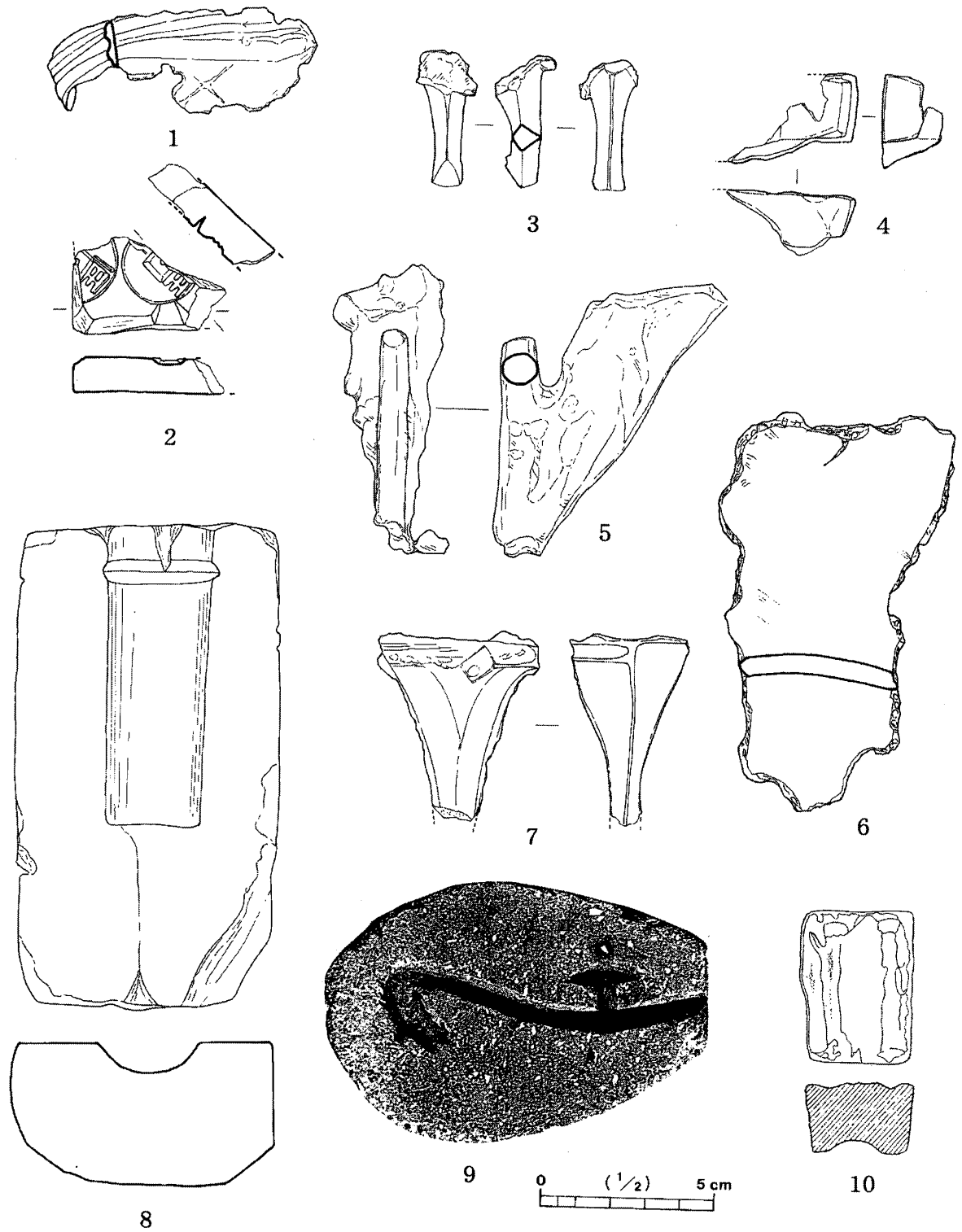
楽浪土城から出土する青銅鏃が中国中原で作られて流入したものか、あるいは楽浪現地で作られたものかを明らかにすることは楽浪郡の有り方を理解する上で大きな意義を持つ。

楽浪土城出土の遺物の中、鏃や茎の鋳型、鏃の未製品など青銅鏃の製作を直接証明できる資料はない。しかしながら次のいくつかの間接的資料から楽浪郡における弩専用青銅鏃の生産の可能性が考えられる。

まず楽浪土城出土の三稜鏃には段差を持つ上下2枚の鋳型で作られたものが含まれているのに注目する必要がある。これは茎になる鉄製あるいは青銅の鋒を別作りし、鋳型3枚で鋳造する燕下都などの三稜鏃製作とは違う技法である。もちろん中国本土においても三稜鏃の鋳造がある時期に3枚鋳造から2枚鋳造に変わった可能性も排除できないが、今の資料からは確認できない。これから注目する必要がある。

また楽浪土城では実際様々な種類の青銅器の製作が行われたことが明らかになった（鄭仁盛 2001）。中には精巧に作られた容器の脚片（図11-3）、小型の四角形容器（図11-4）、銅洗などの未製品が含まれている。これらの遺物は漢代の特徴的遺物で細形銅剣関係の青銅器製作は土城出土遺物からは認められない。したがって楽浪郡設置後のある時期には、楽浪土城を中心に自給的な漢式青銅器の生産システムが成立していたことは確かである。

さらに発掘調査によって得られた資料ではないが平壤周辺にはいくつかの漢式青銅器製作用の鋳型の存在が確認できる。図11-9は漢式の帯鉤製作用の土製鋳型で、滑石の粒子が混じっているの



1～7：楽浪土城出土の漢式青銅器製作関連資料，8：伝平壤出土の‘石突’ 鑄型，9：伝平壤出土帶鉤の鑄型（縮尺不明），10：伝平壤出土蓋弓帽の鑄型

図11 楽浪郡における漢式青銅器の製作と関係する資料



が特徴である。図11-10は蓋弓帽の鏃型（鄭白雲 1957）、図11-8は戈や矛の石突製作作用の鏃型（梅原資料）で両方とも細形銅劍関連の青銅器には見られない漢式青銅器の要素である。また楽浪土城からも出土する半両銭の鏃型、伝平壤とされる五銖銭、小川直一などの母范資料（国立中央博物館2000）も楽浪郡設置以後の漢式青銅器の生産を思わせる材料になる。

## VI. 楽浪郡の周辺地域における三翼・三稜鏃

日本列島と韓半島の南部地域には楽浪郡からもたらされたと思われるいくつかの三翼・三稜鏃がある。まず三翼鏃は会下山遺跡や原の辻遺跡での出土例が報告されている（小田富士雄 2000）。会下山遺跡出土遺物は断面が円形に近い中心軸の三方に翼が付くタイプで頸は円形で茎は鉄である。三翼 B 式に該当し楽浪石巖里200号出土の三翼鏃と形式的に類似性が高い。また原の辻遺跡出土の銅鏃は断面円形の中空軸の三方に翼が付く型式だが鏃の下半部が欠損している（嶺南・九州考古学 2000）。残っている上半部の断面は円形で頸も円形中空であった可能性が高い。三翼 A 式に該当する。

三稜鏃は韓国の場合済州道の三陽洞遺跡、慶尚北道慶州の九政洞遺跡、慶尚南道泗川勒島遺跡の B 地区、光州新昌洞遺跡からの出土が知られている。日本列島では北九州のクエゾノ遺跡、沖縄の宇堅貝塚、岩手県熊堂古墳等からの出土報告がある。韓国済州道三陽洞遺跡出土の三稜鏃は頭部が断面三角で頸は 3 形、茎は鉄で三稜 A I a 3 式である（済州国立博物館図録 2000）。九政洞遺跡出土の鏃は頭に切り込みを三つ持つ三角形で頸は 3 形に近い。茎の材質は明らかでない（崔鐘圭 1996）。新昌洞遺跡出土遺物はまだ実物を観察してないが、調査担当者によると済州道の三陽洞出土品と同じ型式で茎は鉄だという。四州市の勒島遺跡から出土した遺物も A I 式であるが、まだ未報告で切り込みの数や頸の形はわからない。クエゾノ遺跡からは 7 点の三稜鏃が出土したが、図面が公表されたのは 1 点のみである（小田富士雄 2000a）。頭部は断面三角形で切り込みがなく茎は鉄で頸は 2 形に近いことから A I a 2 式となる。沖縄の宇堅貝塚出土の銅鏃は A I d 2 式で、珍しく頭の切り込みが平面楕円形である（小田富士雄 2000a）。同じく楕円形の切り込みをもつ A I 式の鏃が貞栢洞 1 号でも見られることは前述の通りである。

このように日本列島や朝鮮半島の南部地域から出土する三翼・三稜鏃は楽浪郡からもたらされたものであろう。流入時期はおそらく楽浪郡でこのような鏃が主に使われ、また副葬される楽浪 2 期や 3 期の可能性がある。ただ原の辻遺跡の鏃は形式的特徴上、楽浪 1 期あるいは楽浪郡が置かれる前の衛満朝鮮を通じて入手した可能性もある。それは原の辻遺跡からは楽浪墳墓では副葬が殆どない中国式劍が出土しており、このような中国劍は韓半島西南部の完州上林里や咸平草浦里などの例から紀元前 2 世期頃に編年できることも根拠の一つである。

弩専用の鏃が韓半島の南部地方や日本列島から出土することで、この時期にすでに武器としての弩が導入されていたと見ることはできない。弩は一般的な弓より弾性が大きいため弩を両足で踏み両手で弦を引いて矢をセットする。したがって弩機（弩の引き金など）なしでは弩の鏃としては使

えないものである。これまで韓半島の南部地域や日本列島ではこの時期に弩機が発見された例がない。結局韓半島南部地方や日本列島から出土する弩転用の銅鏃は銅鏡、車輿具、四葉座金口などの舶製青銅器同様、本来の機能を失い威信材として流入されたものであろう。

註

- 1) この数値は青銅貨幣を除いたものである。貨幣は破損したものが多いため正確な資料の数の把握は難しい。
- 2) まだ正確になにを意味するかは分かっていないが、遺物を入れた調査当時の封筒の一部にはこのような番号がある。
- 3) 東京大学考古学研究室の考古図編を作る際に与えた番号のようである。
- 4) この出土頻度では1935年と1937年の楽浪土城の発掘調査により出土した資料のみ検討対象とする。『楽浪郡時代ノ遺跡』等に収録されている鏃資料は、すでに種類別に選ばれた後のもので頻度を確認するには問題があるからである。
- 5) 秦始皇帝兵馬俑1号坑出土鏃の茎が別鑄であることは、茎と頸部の接合面に鏃の鑄造時はみ出した青銅の張りが残ることから分かる。

<引用・参考文献>

- 林巳奈夫 1976 『漢代の文物』 京都大学人文科学研究所 京都。  
林巳奈夫 1972 『中国殷周時代の武器』 京都大学人文科学研究所 京都。  
河北省文物研究所 1996 『燕下都』 文物出版社 北京。  
原田淑人 1931 『牧羊城』 東亜考古学会 東京。  
李 淳鎮 1964 「夫祖濊君の墓について」 『考古民俗』第4集 平壤。  
鄭 白雲 1957 『朝鮮金属文化起源に対する考古学的資料』 科学院出版社 平壤。  
楽浪漢墓刊行会 1974 『楽浪漢墓第一冊』 奈良。  
駒井和愛 1938 「楽浪銅鏃考」『東洋史会紀要第三冊』 東洋史会 東京。  
駒井和愛 1965 『楽浪郡治址』 東京大学文学部 東京。  
東京国立博物館 1992 『僧侯乙墓』 東京。  
樋口隆康 1994 『秦の始皇帝とその時代展』 日本放送協会 東京。  
鄭 仁盛 2001 「楽浪土城と青銅器製作」『東京大学考古学研究室研究紀要』第16号 東京。  
国立中央博物館 2001 『楽浪』 ソウル。  
高久健二 1995 『楽浪古墳文化研究』 ソウル。  
朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会 1989 『朝鮮遺跡遺物図鑑』2 平壤。  
崔 鐘圭 1993 『三韓社会に関する考古学的研究』 東国大学校大学院博士学位論文。  
関野貞外 1927 『楽浪郡時代ノ遺跡』 古蹟調査特別報告第4冊  
増田精一 1970 『スキタイ系遊牧民の活躍』  
鳥居竜蔵 「スキイト族三翼式鏃について」『人類学雑誌』第三十七卷五号 東京。  
小田富士雄 2000a 「沖縄の弥生時代と外来遺物」『高宮壘衛先生古稀記念論集』  
小田富士雄 2000b 「漢式鋼鏃覚書」『原口正三先生古稀記念論文集・あまのともしび』